
プランシャール家の人びと

北津谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プランシャール家の人がと

【NZコード】

N4197T

【作者名】

北津谷

【あらすじ】

フランスを舞台にしたバンパイア一族のお話です。

横柄で気性の激しい長男アルテュール、親から相手にされない努力家の次男クリストフ、世間知らずで夢想家の長女アレットの三人が一応の主人公。

物語は幼年期、思春期、青年期と分かれています。章単位のオムニバスなんですが、どう表示されるやら。

兄妹間の恋愛や、同性間の恋愛をほのめかす描写が含まれます。

プロローグ

なぜ人は生まれ、死んでゆくのかといったことは、今も昔も永遠のテーマだ。

愛もそれと同じで、人を愛する理由がはつきりしない限り、それについて語ることは許されない。だからこそ永遠のテーマになる。愛に理由が必要になる日が来ることはないからだ。理由もなく愛しいと思うからそこに愛情が伴うわけであり、もしもここに理由があればそもそも愛しいという気持ちも起こらないだろう。

異性であれ同性であれ、親であれ兄弟であれ、お互に愛情を持つことは少しも不思議なことではない。もし家族であることに理由を求めるのならば、この社会はたちまち崩壊する。無条件に愛しいと思えなければ、それはもはや家族ではないからだ。

ラパール村の秘密（前書き）

将来的に出版社に提出するつもりで書いている「サンジュルマン伯爵と夕食会につき（仮）」の一章目のプロローグを一部使用しています。

ラパール村の秘密

フランスの西部、貿易都市に囲まれた小さな村ラパールを訪れた人は、決まって「あそこの人たちは陽気だけど、いつもどこかよそよそしかったな。顔色も悪かったしね」と言つのだった。村ではさまざまな種類の花を栽培しており、毎年暖かいバカンスの季節になると、その花を一目見ようと、フランス中から大勢の人々が押し寄せてくる。特に六月に行われる「花祭り」という一大イベントでは、村の人口は普段の三倍にまで膨れ上がるのだった。

村の中心地には役場と教会だがあり、村を東西南北と十字に区切る大通りの中でも、北から南に通る道はメインストリートと呼ばれ、歩行者たちが夏の強い日差しに苦しむことがないようとに、アーケード街に屋根が設置されていた。ほとんどの民家に花壇が設けられているため、村中どこを歩いていても花の良い香りが漂つてくる。

古く大きな造りの屋敷は村の北東部に集まっていたが、メインストリート沿いにも新しいアパートが建てられるようになつた。それらのベランダにも当然鉢植えがつり下げられている。他の田舎の地域では若者が都会に出て行つてしまつことが深刻な問題になつてゐるにも関わらず、この村の若者はほとんどが生まれ育つたこのラパールという土地に留まつていた。

村で最も古い姓はブランシャールといつて、本家はサングヌーブという北東における特別居住区にあつた。三百年も前からこの土地で生活しており、かつては彼らの発言一つで議会がひっくり返るほどの権力を持つていた。

田舎のぱつとしなかつたラパール村を、国内でも指折りの花の観

光地へと押し上げたのは、かつての村長シモン・リュベンという男だった。彼はその偉業を称えられ、彼は四歳の時に両親と数人の親せきと共にオーストリアからこの村に移り住み、以来息を引き取るまでずっとこの村を離れなかつた。オーストリアではルーベンスという姓だったが、フランスに移住したことによりフランス読みでリュベンと名乗るようになった。

シモンはその大らかな人柄も手伝つて、人望を集めのがとても上手く、村おこしのために演奏会やスポーツ大会を計画しては、その全てを巧みな話術をはじめとする交渉術で成功させた。おかげで村の住人はうなぎ上りに増え、気づけばリュベン家は村一番の富豪となつていた。彼は身なりに気を使う男で、どんなに朝早く訪ねようとも、そのくすんだ黄土色の髪に寝癖が付いていることはなかつたし、彼は髭の一本にまで神経を張り巡らせていたようだつた。それだけなく品があり働き者で、どんな状況でも物事を冷静に見る能力があり、まさに絵に描いたような理想の村長だつた。

しかし、ラパール村を訪れた観光客たちの言葉通り、この村の住人たちは、外部からやつてきた者たちに対して決して心を開くことはなかつたし、表面では親しげにしていたが、心の底ではよそ者たちを追い出しあきたてまらなかつた。なぜなら彼らには知られてはいけない大きな秘密があり、それが知られてしまうのを恐れているからだ。

ラパール村はフランス国内でも長寿の村として知られている。平均寿命は九十八・六歳。しかしそれは死亡届を偽装した場合の話で、実際の平均寿命は百四十歳以上とされている。中には一百歳生きたという例もある。これは珍しい話ではない。種明かしをすると、村長を含めて村人のほとんどがバンパイアでなのだ。だからみんな顔が青白い。

ラパールだけではなく世界各地に、こうしたバンパイアが人口の大半を占める市町村がある。ドイツがどうにかして純血の保存に尽力しているが、良い話は耳にしていない。スペインは二十年前に村 자체が戦火に巻き込まれて消滅してしまった。六十年前にオランダに住む純血のバンパイアが提案した人との共存は、最近になつてスウェーデンをはじめとする、北欧で活発に行われるようになつた。ラパールもかつては人の血が一滴も混じらない、純粹なバンパイアだけの村だつたが、人との混血が進んだ結果、この村には純血種が今やごく僅かになつてしまつた。リュベン一家も、オーストリアで最後の一族になるのを恐れてこの村にやつてきたのだ。

プランシャール家について

かつては榮華を極めたプランシャール家も、時代の流れとともに歴史と伝統という重みに敷かれて、かび臭さを放つようになり、純血と混血の比率が逆転した頃から、その高貴な血の保存に関してはより神経質になつていつた。

プランシャール姓を名乗る最後の純血であり、とりわけ血を重んじていたエリーズは、同じ祖母を持つ従姉弟のロベルと自ら進んで婚姻関係を結んだ。血縁者同士の婚姻は決して珍しいことではなかつたが、エリーズはロベルよりも三歳年上で、婚約当時二十歳だったロベルは、バンパイアとしての洗礼を受けてまだ一年も経つていなかつた。エリーズは家柄、家庭内での発言力、屋敷の相続権、その全てにおいて夫より勝つていた。

夫婦は三人の子供たちに恵まれた。

結婚の翌々年に長男のアルテュールが、その翌年に次男のクリストフが、それから一年後に長女のアレットが生まれた。両親に似てくすんだブロンドの髪に、ブルーがかつたグレーの瞳を持つアルテュールとアレットに対して、クリストフだけが祖父に似たブルネットの髪にグリーンの瞳をしていただつた。

アルテュールは利発でエリーズに似て気性が激しかつたが、反対にクリストフは物静かで温厚な少年だった。エリーズは二人の兄の気質をそれぞれ持ち合わせており、利発で思いやりがあつた。

屋敷にはドニという禿げ上がつた赤毛の痩せた男と、ジゼルという褐色で、背の高い若い娘を雇つていた。二人ともバンパイアにおける暗黙の了解 純血種以外のバンパイアは人間と寝てはいけないを破つたため、顔の右頬に「p」という罪人の烙印が押され

ている。この黒く爛れた印を施されたバンパイアは、この先死ぬまで罪人として生活をしなければならなかつた。

兄妹の中でも特にエリーズの思想をそのままそつくり受け継ぎ、何よりもバンパイアとしての誇りを重んじているクリストフは、この二人に対しては言葉に表現できないほどの嫌悪感を抱いていた。

ちょうど一昨年の春先に、現村長であるシモン・リュベンスが、有り余る財産で豪勢な屋敷を立てたため、ブランシャール邸は今や村で一番目の屋敷となつてしまつたが、それでも家族五人と一人の使用人が暮らすには十分すぎるほどの広さがあつた。

改装を重ねてきたため、本来の外觀はどうの昔に失われてしまつていて、ブランシャール姓のバンパイアたちが、百年近く過ごしてきた家であることに変わりはない。約四十年前にエリーズが産声を上げたのは、一階のベッドルームのことだつた。

ラパール自体が広い村ではないため、移動に自動車は必要ない。そのためほとんどの家の脇にはいつも自転車が立てかけられていた。サングヌーブにあるブランシャールの屋敷の周りには、フェンスの代わりに背の低い木が植えられており、それが春先になるとまたきれいな花を咲かせる。花の公園で有名な村というだけあって、村のほとんどの家庭に栽培の専門家がいた。

彼らの体温と同じくひんやりとした石造りの階段を上ると、リクリエーニングチェアが二つと、チエスボードを置くことのできるだらう広いポーチに出る。そこには何も置かれていない。

年季の入つた真鍮のノブの両開き扉をくぐると、一階の部屋全てに通じるエントランスホールが出迎えてくれる。つい五年ほど前に屋敷内の明かりが電気に完全移行するまで、ホールを照らすシャンデリアをはじめとする、蠅燭の点灯はドーの仕事だった。

アーチ続きのリビングルームからは、かつて花公園を一望できたのだが、公園の移転により今はアパートと小学校の外壁しか見えなくなってしまった。今は亡きエリーズの父親はソファに腰掛けて花を眺めながら、花の世話をする村娘たちを眺めるのが日課だった。そうやってぼんやりとソファに座っていると、育ち盛りの子供たちのために用意された料理の匂いが漂ってくる。エリーズがキッチンに立つことはなく、料理は専らドーかジゼルの役目だった。

子供たちには一階にそれぞれ一人部屋があてがわれた。長男のアルテュール、次男のクリストフには廊下を隔てて向かい合った部屋を。長女のアレットは階段から最も近い部屋を。部屋はそれぞれ三人の個性と、保護者からの愛情を見事に反映していた。

アルテュールは少年らしい、好みのはつきりとした部屋だった。棚にはおもちゃやサッカーボールが並び、形だけの勉強机はいつまで経っても真新しいのに、引き出しからはいつもスナック菓子の欠片や鉛筆の削りかすが大量に出てくる。そのためジゼルは彼の部屋を掃除したがらなくなつた。

対照的にクリストフの部屋は、七十歳を過ぎた老人のような色彩に欠ける内装で、それは暗に彼のこの家での存在感の薄さを示していた。本棚には少ないお小遣いで買い揃えた冒険譚や伝記が並び、壁には家族の写真ばかりが貼られていた。

アレットの部屋は末っ子ながら、兄妹で最もお金が掛かっていた。絵画やベッド、本棚に勉強机といった高価な家具に、大量のぬいぐるみや絵本や人形は、アレットだけでなく兄たちの興味を引くのは十分だった。

そしていつからか兄妹たちは、アレットの部屋で遊ぶようになつた。

幼い頃から母親からの愛情の差も手伝つて、あまりそりの合わない

いアルテユールとクリストフは、アレットの部屋にいるときだけはお互いに仲良しになつた。二人が喧嘩をはじめると妹が泣くからだ。しかしそれも長くは続かず、アルテユールが小学校に入学し、そこでの友だちと遊ぶようになると、兄妹たちの時間は減り、アルテユールとクリストフは言葉も交わさなくなつた。

兄たちはお互いのいない時間を見計らつてアレットを訪れるようになり、アルテユールはいつも覚えたての遊びを妹に披露したが、彼女が笑ってくれない時はその度に彼女を叩いて泣かせた。

毎日夕方になるとエリーズはクリストフだけをキッチンに呼びつけて、理不尽な理由をつけて彼を叱つた。部屋が汚いだの、妹を泣かせただの、生意気だの。そのほとんどが言いがかりだつた。

エリーズはアルテユールが欲しがるものはなんでも買い与え、どんな悪戯にも目をつぶつた。

そんな妻に対して、ロベールは長女を必要以上に可愛がつた。彼女の部屋の家具やおもちゃは、全てロベールによるものだ。毎月アレットが生まれた日が来ると、洋服や人形や絵本をプレゼントした。ところがクリストフだけは何をしても両親から愛されず、見かねた叔父が彼を愛するようになつた。クリストフにとつて両親がしてくれたことは、この世に産み落としたことだけだったが、それでもクリストフは彼らを誰よりも愛し、兄として妹のアレットを可愛がつた。クリストフにとつてアレットは家族の中で唯一、優しく接してくれる存在だつたからだ。

兄と妹（前書き）

兄妹間の恋愛をほのめかす描写があります。

兄と妹

アレットが小学校に入学すると、もうアルテュールは妹を叩くことを止め、今度は他人行儀に距離を置くようになった。なぜなら妹を可愛がるあまり、恋をしてしまったからだ。

*

アルテュールはアレットの部屋に入る度にこう思った。まるで夢の中にあるみたいだ、と。

桃色を基調にした上品で可憐な壁紙に、時折ランプの灯りが揺らめいている。花を摘む少女の絵画が掛けられているその下に、王族の姫君が眠るかのような豪華絢爛な、それでいて淑やかな天蓋つきのベッドがあり、その足元には手触りの良い柔らかい絨毯が敷かれている。

妹は暖炉際のアームチェアに腰掛けて、お気に入りの詩集に目を落としながら時々微笑んだ。アルテュールは胸が締め付けられるのを感じた。

「やあ、アレット」

後ろ手でドアを静かにアルテュールが問いかけると、アレットは勢いよく顔を上げた。くすんだブロンドの髪とグレーの瞳、そしてお辞儀をするように下を向いた鼻は、やはりブランシャール家の血縁者であることをはつきりと示していた。

アルテュールは彼女の顔にその特徴を確認するたびに、気持ちを僅かに落胆させたが、その落胆は恋人の部屋を訪れるような、そんな錯覚からはつきりと目覚めさせてくれもした。

アレットの手の中にある詩集が、忌々しい実弟が彼女に買い与えたものだということに対する怒りを意識することで、アルテュール

はなんとか理性的になろうとした。しかし怒りという本能的な行動で、理性的になろうとするのは、いくらか矛盾している。

九歳の少年が七歳の妹に抱く感情としては、いささか熱を含みすぎているし、彼女が妹でないにしろ早熟だと思うかもしれない。だが、言葉を覚えたばかりの幼児だつて「ジユ・チーム」を言うことが出来る。

「ルネが今日は天気がいいから外に出て遊んでおいで、つて。それで百五十フランを私たちで分けなさいって。クリストフにはもう渡したの。」

そう言ってアレットは本を閉じ、ライティングデスクの上に置いてあつた財布から、五十フラン紙幣を取り出して兄に手渡した。

ルネはエリーズの異母弟で、兄妹たちからみれば叔父あたる人物だ。じきに三十歳になろうとしていたが、いまだ独身だつた。彼にはバンパイアの血が半分流れているが、洗礼を受ける気は無いらしい。アルテユールはそんな叔父のスタイルを格好良いと思っていたが、エリーズは異母弟と顔を合わせるたびに、そのことについてプライドが無いだの恥さらしだのとよく口煩く怒鳴つていた。

彼はパツサージュ沿いのアパートで独り暮らしをしており、平日はメインストリート沿いの香水専門店で調香師として働き、休日になるとミサの帰りに実家に顔を出しては、甥や姪に小遣いや菓子を与えて可愛がつた。彼だけが身内で、三人兄妹を分け隔てなく平等に扱かつていた。

「それでルネは？」受け取つたコインを指で真上に弾いた。アレットは兄から目を離さずに、財布をゆっくりと閉じた。

「お母様たちのところに行くつて。キッチンだと思うわ」

アルテユールはこの部屋に来る途中で、母親と誰かが言い争う声を聞いたことを、妹に打ち明けるべきか考えていた。エリーズが事あるごとに、ルネにクリストフと同じように言いがかりを付けて小

言を言い、ストレスの捌け口としていることを、アレットは知らないに違いない。アルテュールは口をつぐんだ。

「そうか。じゃあパッサージュに行こうかな」アルテュールはアレットの顔色を伺つた。「アレット、何が欲しい？」

「アルテュール、連れて行つてよ」

「キスしたらな」そう言つとすかさずアレットは、その青みがかつたグレーの瞳で兄を見た。

アルテュールはこの先もこの言葉をしまつておくべきだと思つていた。が、ためらうことなく自分の唇を重ねてきた妹を見て、もつと早く言つべきだつたとすぐに思った。妹が自分に対する気持ちが、兄としてなのか異性としてなのかまだグレーだが、これはアルテュールの大きな自信となつた。

アルテュールが唇を開き彼女の、その甘美なる脣内に赤い舌を滑り込ませることは、決して難しいことではなかつたに違いないが、アルテュールはただアレットの両肩を強く握るだけしかしなかつた。兄として彼女をもう少しの間だけ、妹として扱わなければいけないと思つたからだ。

ブランシャール兄弟に共通して花園だつたアレットの部屋を、真っ先に踏みにじつたのは他でもないアルテュールだつたが、彼にとって弟がどういう気持ちを抱こうが、エリーズがどんなにヒステリックに叫ぼうが、アレットさえ居ればそれでよかつた。何もかもが上手くいくと思っていた。

彼女さえいれば血の保存に口づるさい、ブランシャール家のしきたりに、何かしらの突破口が見出せるのではないかと思つたからだ。

*

アレットの手を引いて廊下に出ると、クリストフの部屋から出てきたばかりの叔父を見つけた。ルネはいつも身なりに気を使わない

ため、今日も無造作に伸びたブルネットの髪を一つに束ねているだけだった。頬に剃り残した毛が何本も残っているのを見る度に、将来彼のような不精な大人にはなりたくないとアルテュールは心から思つた。

バンパイアの血を引いている子供たちは視力と嗅覚が鋭い。注意して嗅がなくともルネからは調香師という仕事のせいか、毎日いくつもの匂いが混ざつた、不協和音のような香りが漂つてくる。使い古して毛羽立つていてるトレンチコートからは、パンや下水や雪や泥といった街中の匂いがした。混血は日光に弱い。そのためか、フロントボタンは全て締めてあつた。

アルテュールとは反対に、クリストフは母であるエリーズの考えをそのまま自分の意見にしていたため、身内で唯一兄や妹と同じようく扱つてくれるはずのルネとは関わりたがらなかつた。幼い兄と弟は根本的に相容れなかつたのだ。

だから、アルテュールは弟の部屋の廊下であるこの場所を、社交辞令的な挨拶だけしてさつさと通り過ぎようとしたのだが、優しいアレットは体の弱い兄の部屋の前で足を止めた。

「こんにちわルネ、さつきはどうもありがとう」アレットが叔父に会釈をした。「どうかしたの?」アレットはクリストフの部屋のドアをちらりと見つめた。

「倒れたんだ」そう言つたルネの濃いこげ茶色の髪が、肩をすくめて首を振つた拍子に揺れた。ヘーゼルの瞳は「クリストフ」と書かれた表札を見つめていた。

「また?」思わずアルテュールは口を開いた。

「そう、また。雪が降つてるし、そのせいかもしれない。はつきりとしたことはわからないな」思い出したようにルネは表札から目を離し、コートの埃を払つた。

その間アルテュールはルネの剃り残した髪の質感について考えていた。髪は柔らかそうだったが、髪は硬そうだ、とか。

「とにかくドーを呼んだよ

アルテュールは弟が倒れたことにより、ルネはパッサージュと一緒に行こうと言つ機会を失つてしまった気がした。クリストフに何があると、ルネは必ず異母姉夫婦の代わりに必ず付き添うと言つからだ。

「今日はパッサージュに行こうと思つたのに……」アレットがぽつりと呟いた。

「そうだね、僕も残念だよ。後でジャン・フィリップ神父に連絡しないといけない」ルネは意見を伺つずにアルテュールを見た。「パッサージュにはロマンと行つたりどうかな。クリスマス休暇に入つているから帰つてきているだろ?」

「ロマン? ドイツ人の?」

アルテュールはすかさず舌を出した、と同時に黒髪でニヒルな笑顔が脳裏にさつと過ぎた。ロマンは村長の息子で、今は県外の高中一貫校に通つている。アルテュールよりも五歳年上の十四歳だ。小学校に入学したての頃、アルテュールは彼にバケツの水をかけられたことがあり、それ以来顔を合わせるのも嫌なほど、村一番の天敵だった。

「正確にはオーストリアだね。気取つたところがあるけど、良い子だと思うよ」

「嫌だ、嫌だ。絶対に嫌だ!」

「じゃあパッサージュには行けないね。残念だ」ルネは肩をすくめた。

「クリストフなんか放つておけばいいじゃないか」

「アルテュール、それは駄目よ」アレットは兄の手を戒めるかのように強く握り締めた。

アルテュールがすねたように乱暴に妹の手を振り払うと、それと丁度同時にドニが氷水を張つた洗面器とピッチャー、グラス、それから毛布を持って階段を上つてきた。禿げた頭に汗が滲んでいるの

が見えた。荒い息に混じつて、喉の奥からひゅうひゅうとうとう音が聞こえてくる。ドーを嫌っているクリストフにしてみたら、彼が看病道具を持ってきたことは屈辱に違いない。

アルテュールは内心ほくそ笑んだ。ちなみにアルテュールはドーのことを普通の使用人のように思っていた。

「ありがとう、ドー。助かったよ」

そう言つて微笑むと、ルネはクリストフの部屋のドアを開けてドーに入るよう促した。ドアの隙間から少しだけ見えたのは、ベッドにクリストフが横たわっている姿だった。

「パッサージュに行くならロマンに連絡をすること。いいね」ルネは兄妹が頷くまで一人を睨みつけた。一人が頷くと、今度はにっこりと微笑んだ。「もしよかつたら教会に行つて、ジャン・フィリップ神父に僕が手伝えないことも伝えてくれるかな？」

「わかつた、伝えておくよ」アルテュールはアレットが教会で何をするのか、という質問をする前に彼女の言葉を遮つて頷いた。

ルネが静かにドアを閉めると、アルテュールは階段を駆け下りて、エントランスホールの電話に向かつた。この村にリュベン姓は一軒しかいため、電話帳名簿を開くとすぐに見つかった。

外に出ると、雪が薄つすらと降り積もっていた。地面に落ちると同時に、雪が解けてしまつため、積もりそうにはなかつたが、それでもアレットは大はしゃぎだつた。

ポーチで雪玉を作つて遊んでいると、じきにロマンがやつてきた。中学に通うようになり背が伸びたらしに。学校の指定なのが着ているダッフルコートは雨合羽のようで、色も苔色と色気がない。ポケットに手を突つ込んで胸を張つて歩いているのは、滑稽そのものだつたが、どういうわけか様になつっていた。

アルテュールは玄関にルネの傘を見つけたが、ロマンはバンパイアではないのか手ぶらだつた。なぜルネがロマンと知り合いなのか疑問に思つたが、彼と話をしたくなかったため、アルテュールはそれについて考えることを止めた。相変わらずカールしている少し長めの黒髪には、ふけの様に積もつている雪が目立つたが、それも何かおしゃれのようになつてしまつほど、ロマンは格好良かつた。

「よう　　ずぶぬれ」唇を片側だけ吊り上げる笑い方は、水を掛けた時と全く変わつておらず、アルテュールは無意識に、アレットと繋いでいる手に力を込めた。

優しげに下がつた目尻に、やや上を向きがちの鼻、微笑を浮かべているかのような薄い唇。その全てが絶妙なバランスで、しつかりとした、しかしまだ発達途中の骨格の顔に並べられているのだ。ラパールに住む子供たちの中では、ロマンは最も美しい顔立ちをしるし、誰もがそれを認めていた。

しかしアルテュールはロマンのその自信に満ちた、しかし二ビルな笑い方が大嫌いだつた。見下されていふような気がするからだ。

「そつちは妹?」ロマンは顎でアレットを指した。

アルテュールはロマンのその仕草が気に入らなかつたが、答えな

いわけにはいかなかつたため、短くぶつめりぱつこ「やう」と答えた。

ロマンは何か企んでいるような顔で、アレットに微笑みかけ右手を差し出した。「はじめまして」

「おい、アレット」妹が応じて手を差し出せりとしたため、アルテユールがすかさず声を出した。

「どうしたの、お兄ちゃん?」ロマンはわざとらしくおとなとした表情をして見せた。

「うるさい、黙れ」

アルテユールは妹の手を引き、パッサージュに続く道を大股で進んだ。アレットは転びそうになりながら兄の歩幅に合わせて歩いたが、やはりロマンが気になるよつで時々彼を振り返つた。

ロマンは両手で頬を覆つと、しばらくその場から動かなかつた。その間にも幼い兄妹は彼から遠ざかっていた。やがて何か考えが浮かんだかのようにため息をついくと、頬から手を離してやや駆け足で一人を追いかけた。

ロマンが隣に並んでいることに気づいたアルテユールは少し歩く足を速めた。

「おいアルテユール、転びそうだぞ」

「転ばない!」アルテユールはアレットを振り返ることなく答えた。しかしロマンの忠告通り、アレットは何度も足をもつれさせていた。しかしそれでも兄に合わせて必死に歩いていた。ロマンはしばらくアレットを見ていたが、アルテユールに視線を移して少し声を張り上げた。

「アルテユール!」

「うるさい!」

アルテユールがロマンに反発して手を離した拍子に、アレットはぬかるんだ雪に足を滑らせてしまい、積もっていないむき出しの地面に勢いよく飛び込んだ。アルテユールが青ざめたのと、ロマンが

その端正な顔から感情を消したのは、ほとんど同時だった。

運良く転んだ場所は水溜りがなかつたものの、アレットの服には泥と砂がべつとりとついてしまつていた。自分ひとりで立ち上がると、彼女は寒さで赤くなつた顔を歪めて、声を出さずに唇を噛み締めて、痛みに耐えながら静かに涙を流した。

アルテュールは妹の目線の高さまで腰を屈めて、彼女の服についた泥を払つた。「どこが痛い？」

アレットは首を振つた。下に兄弟のいないロマンはどうしてもいいやらわからず、コートのポケットに手を突つ込んで、立ち尽くすことしかできなかつた。

「おんぶは？」

アレットはしばらく兄を見つめてから、鼻を啜つて頷いた。

「おんぶできるのか？ 代わろうか？」

「つるさい、黙れ」アルテュールは妹に背中を向けてしゃがみ、彼女が乗るのを待つた。

ロマンはやれやれという顔で、アレットを背負つたアルテュールが立ち上がるのを眺めていた。彼の顔には片頬の吊り上つた、やはりニヒルな笑顔が浮かんでいた。

パッサージュまで、あと百メートルといったところだつた。

パッサージュは村で最も人の集まる場所だ。この通りにだけ食料品、衣料、薬、本などを取り扱う専門店が並び、村の流行りはいつもここから生まれる。しかし十歳以下の子供たちだけで来てはいけない、という決まりがあるため、中には十歳になるまでこの場所を訪れたことがなかつたという子供もいる。ブランシャールの三兄妹は、何度も親やルネといった親戚の人たちと一緒に訪れていたが、今回のようにロマンのような十代の子供とは來たことがなかつた。以前アルテュールは学校帰りに、同級生だけでパッサージュに潜り込もうとして、花屋の女将に見つかり追い返されたことがあつた。

幸い学校には報告されなかつたが、女将にこっぴどく叱られた。

なぜ子供たちだけでパッサージュに行つてはいけないのかアルテュールは知らなかつたし、大人たちも教えてくれなかつた。

*

アルテュールはいつものように人で溢れかえり、活気に満ちたパッサージュを想像していたが、偶然今日は土曜日で、さらに一般的にクリスマスの飾り付けが行われる前日であるため、開いている店は数えるほどしかなかつた。そのおかげで普段に比べ活気が無く、ショーウィンドウに飾り付けられたクリスマスリースが寂しく思えた。

村の大半がカトリック教徒だったが、ルネを除くブランシャール家の人々は、イエス・キリストを信じていないので、クリスマスとは全くの無縁だつた。純血であることに誇りを持ちすぎるあまり、人の文化を拒絶しているからだ。だから、アルテュールやアレットはショーウィンドウに飾られている、もみの木を模つた飾りものや、パッサージュの中心に立つてている装飾を施された木が、何を意味するのかもわからなかつた。

パッサージュに到着する頃になると、アレットも泣き止んでいた。アルテュールの疲労も手伝つて、彼女はまた自分の足で歩くことになつた。

人通りが少ないため人とぶつかる危険はなかつたが、アレットがクリスマスの飾りに釘付けになるたびに、アルテュールは彼女の手を強く引いた。エリーズはクリスマスを真っ向から否定していたが、クリスマスツリーを飾りおいしいものを食べて、年明けにプレゼントをもらうというクリスマスを、実を言つとアルテュールはうらやましく思つていた。

「君らの家だとクリスマスは珍しいのか?」ロマンがニヒルに笑つ

た。

「どういうところか知っているだる。わかつたら黙つて紫の紐がついた輪つかでも飾つていろ」

「おいやアルテユール、何か勘違いしていいか?」ロマンはコートのポケットから右手を出し、人を小ばかにしたような表情で、アルテユールを指差した。「言つとくけど、お前らはカトリックじゃないぞ」「じゃあ何だ? 正教か? ヒンドゥー教か?」

「馬鹿がお前は。帰るぞ」付き合つていられない、とでも言つた氣にロマンは首を振つた。「うちもお前らのこと一緒だよ」

「嘘だ」アルテユールは不信感を露に、目を細めてロマンをにらみつけた。

「嘘じやない。ルネから聞いてないのか?」

「聞いてない」アルテユールは即答した。

ロマンは眉間に僅かにしわを寄せてアルテユールを見下ろした。アレットは一人がやり取りをしている間、パッサージュの突き当たりで、きらきらと小さなライトを点滅させて、三メートルはあるのではないかという、大きなクリスマスツリーをじつと見つめていた。

「ルネは甥っ子に話をしているつて言つてたが お前と妹の他にもう一人いるのか?」

「居るよ。弟が一人」

アルテユールが答えると、よつやくロマンは合点がいったようだ、ため息をつきながら首を振つた。アルテユールは気取り屋で、人を小ばかにするロマンが嫌いだつた。

そして、彼と親愛なる叔父 ルネがどういった関係なのか知らないが、そこにクリストフが関わつていると知るなり、弟に対するどうしようもなく醜い感情が沸きあがつてきた。弟は自分と妹の間だけでは飽き足らず、叔父の知人の間にまで割り込んで来るのだ。「ルネとどんな話すんの?」アルテユールは純粹な好奇心から尋ねてみた。「友だち?」

「何だそれ」ロマンは片頬をつり上げて、まるで馬鹿みたいに笑つた。

「ルネはいつもうちには一人で来るし、誰と友だちなのかも全然教えてくれないんだ」

「確かにそういう節はあるな」ロマンはアルテュールとアレットをそれぞれ見た。「ところで弟はどうした?」「

「家。寝てるよ　おい、話をばぐらかすな」

「おいアレット」

ロマンが呼びかけたものの、アレットはクリスマスツリーに未だに夢中で、返事をえしなかつた。

ロマンは彼女の傍まで歩いていき、彼女と同じ目線になるよう腰をかがめた。「おいしいクッキーを売っている店を知つていろ」恐ろしく丁寧な口調で、その上にひつと微笑んだ。「案内してあげよう」

九歳のアルテュールならまだしもロマンは十四歳だ。七歳のアレットを軽々と抱き上げて足を進めた。アルテュールは無視をするロマンにもそつだが、アレットが抵抗しないことにも腹を立てた。

「おはぐらかすなよ。答える」アルテュールはその場で地団駄を踏んだが、ロマンは氣にもせずに歩き続けた。「おい！」

「アルテュール」ロマンはその場で足を止めて振り返つた。「ルネはお前には話したくない、ってことなんじゃないのか？　あいつが自分から言ひのを待つしかないと思うけど」

そう言つとロマンはまた歩き始めた。ルネがクリストフだけに打ち明けて、アルテュールやアレットには話をしないということに、理由があるということだろうか。クリストフはルネに秘密の話をしでもらえるほど、特別な何かを持つてゐるだろうか。

アルテュールはロマンの色あせたダッフルコートの背中を睨みつけて、彼の言つたことを理解しようとしたが、ロマンの言つたこと自体の意味がそもそもわからなかつたし、頭も早々に考へることを

放棄してしまった。アルテュールは考えることに集中して、いつの間にか止まっていた足を、再び動かしてロマンを追いかけた。

「待てよー。アレットを返せー！」

ロマンとアレットは黄色の看板が掲げられた店の前で立ち止まつた。

本屋だ。

しかしショーウィンドウにはシャッターが下ろされており、開店しているようには思えない。店の出入口には施錠されている。諦めて帰るしかないだろう、とアルテュールは内心せせら笑つたが、ロマンはお構いなしの様子でアレットを抱きなおすと、本屋とその隣の建物の間の細い通路へ足を進めた。

一般的に言う関係者以外立ち入り禁止の、つまり店を経営している家族たちの、プライベートルームへの抜け道である。しかし知人でもない人の家に入るには抵抗がいる。アルテュールはロマンについて行くべきか悩んだが、アレットが彼と一緒に居るため、妹を置いてどこかに行くわけにはいかなかつた。

通路の先は一階に続く階段があり、ロマンは階段を上がりつてすぐの踊り場にいた。ベルを鳴らして、招き入れてもうのを待つているところだった。階段を上りながら耳を澄ませると、家の奥から足音が聞こえてきた。玄関の戸を開けたのは、ブルネットの髪の短い女性だつた。黄緑色のシャツに、クリーム色のカーディガンを羽織つていて、玄関ポーチ兼階段の踊り場に、屋根が突き出しているのを見ると、彼女はもしかしたら混血なのかもしれないといつ考えが浮かんだ。

「あらロマンじゃない」黒いアイラインが引かれた彼女の目が、嬉しそうに細められた。「久しづり」

「久しづり、マリ アンヌ」そう言しながら、ロマンはアレットを下ろした。

「」の子はどうの子?」彼女はアレットと同じ田線の高音こじゅがんで尋ねた。

「ブランドンシャールの本家の子」背筋を伸ばしながらロマンが答えた。「それで、あいつがお兄さん」階段の踊り場の隅に立っているアルテユールを指差した。

「はじめまして」彼女は笑顔でアレットに片手を差し出した。「私はマリ アンヌ・ブショよ。よろしくね」

「アレット・ブランドンシャールです」アレットははにかみながら、自分の手をマリ アンヌの手に重ねた。

「アルテユール、挨拶は?」ロマンがゆっくりと顎でマリ アンヌを指した。

「いらっしゃるさい」アルテユールは顔をしかめた。「アルテユール・ブランドンシャール。よろしく

「ようしへ」マリ アンヌは寛容な笑顔で応えた。

玄関扉の外には大きなステンレスの傘立てがあり、雨傘が三本と日傘が一本あつた。つまり、一人家族のうち誰か一人は、確實に混血ということだ。普段純血か混血か人か、ということをあまり気にしないアルテュールだったが、バンパイアであるとロマンが先ほど打ち明けたばかりで、それに対する関心が普段よりも敏感になつていた。

玄関に入つてすぐに、上階に続く階段があつた。三人は玄関の左手にあるリビングに案内された。位置からして店舗の、すぐ上の部屋だろう。窓際の壁に紫色のリボンが結ばれたリースが飾つてあつた。中心には蝋燭が立てられていて、おそらくマリ アンヌもカトリック教徒に違ひない。

リビングの三人がけのソファに座るように促されて、ロマンはここが自宅であるかのように、真っ先に腰掛けた。アルテュールは1人掛けのソファに座ろうと思つたのだが、アレットがそこに座るといつて聞かなかつたため、しぶしぶロマンの隣に腰を下ろした。二人の間には一人分の空間が空いていた。

奥の部屋から香ばしい匂いが漂つてきた。ロマンもバンパイアであるため、この匂いを嗅いでいるには違ひなかつたが、彼は全く気にも留めずに、水槽の金魚を眺めていた。アレットはとくに、本棚から絵本を取り出して読んでいた。

じきにマリ アンヌが、バターカップとコーヒーを持ってやって来た。可憐な花柄のティーカップが、マリ アンヌのイメージに合つていなかつた。

「ところでロマン、この間言つていたイギリスの本なんだけど、今は廃盤になっているみたいで、ちょっと、ため息つかないで。代わりを取り寄せたんだから」

「本当？」ロマンは眉をつり上げてマリ アンヌを見た。

「本当。でもちょっと難しい本みたいなんだけど、大丈夫？」

「多分、まあ大丈夫だと思う。ありがとう、マリ アンヌ」

ロマンがそう言つと、マリ アンヌは肩をすくめて微笑んだ。

アルテュールは一人のやり取りに耳を傾けようとしたが、それよりも熱いコーヒーに悪戦苦闘していた。マリ アンヌは気を利かせて薄いカフェ・アロンジエを出してくれたが、それでも渋いことは変わりがなく、角砂糖を三つ入れてみたのだが、それも気休め程度にしかならなかつた。溶けきらないざらりとした甘つたるい砂糖と、頑固なコーヒーの渋味に堪えなければならず、アルテュールが涙目になりながらコーヒーに挑んでいる間、ロマンは勝ち誇つたような顔で 少なくともアルテュールにはそう見えた エスプレッソを飲んでいた。一方アレットはココアを飲んでご機嫌だつた。

「 イギリスつて、お前英語なんか読めるのか？」

「 さあ」ロマンは肩をすくめた。「お前には関係ない」と言つてゐるよつに思えた。

アルテュールが嫌いな仕草の一つだ。どうしようもない反応に、アルテュールはマリ アンヌをちらりと見たが、彼女はアレットに大人が子供に対して、よくするジェスチャーをしていところだつた。

「フランス語だけじゃ生きていけない」ロマンは真面目な顔で言った。「中学に入つたらラテン語もしなくちゃいけないんだ」英語を勉強していることを包み隠さず話すあたりが、やはりロマンはフランス人とは違うとアルテュールは思つた。同時に中学入学して、自分がラテン語を理解できるかどうか不安になつた。

「 外国で暮らすのか？」

「俺の夢は サンジェルマンに会つことなんだ」珍しくロマンの両頬が同時に上がつた。嫌な印象を受けない笑顔だ。「会つて話がしたい。彼みたいになりたい

「 ちょっと待て、サンジェルマンって誰だ？」

「十八世紀にヨーロッパに居たつていう人よ」マリ アンヌが答えた。「十一ヶ国語を喋つたとか、アレクサンダー大王と杯を交わしたとか、要するに天才で不死つてこと そうよね？」

「でもそいつが十一ヶ国語喋れるなら勉強する必要ないだろ？」「本名はオーギュスト・フォレ。作り話だつて言つ人もいるけど、俺たちバンパイアもこうして現に存在するわけだし、可能性としてはあり得ると思つんだ」

「本を読むためだよ。全てがフランス語に翻訳されているわけじゃない。彼に会うまでに色々なことを勉強しておくんだ。錬金術、天文学、占星術、音楽、絵画、文学」

アルテュールは生まれて初めて、ロマンに尊敬の念を抱いた。人よりも知識があるため、高慢になつてしまふのかもしないが、きちんとした夢を持つており、そのために何をするか考えていたからだ。ロマンはまだ中学生にもかかわらずだ。

サンジエルマンについては胡散臭いものを感じたが、彼の気分を害してはいけないと想い、あえて口には出さなかつた。同時に、あのロマンを夢中にさせるサンジエルマンとは、どういう人物なのかもっと知りたくなつた。しかしここでロマンに質問をして答えを得るのはしゃくなため、自分で調べてみることにした。

「あれ、ところでマリ アンヌ」アルテュールはクッキーを一つ掲げて見せた。「このクッキーって？」

「気がついた？ 教会のクッキーはうつりで作つてゐるの。正確にはうちのお母さんなんだけね」

アルテュールはクッキーをすかして見てみた。よくルネがミサの帰りに持つてきてくれる、バタークッキーそのものだつた。

「教会 くそ！」アルテュールは突然声を上げた。「神父に伝えることがあつたんだつた」

「悪をしたのか？」ロマンが片頬をつり上げて笑つた。

「つるさい、黙れ」アルテュールは顔をしかめた。

「ルネの欠席のこと？」ロマンはバタークッキーを齧つた。

「あの人今日来ないの？」マリ アンヌの声はどこか嬉しそうだつ

た。

「弟が倒れたから面倒を見るらしいんだ」

「早く伝えたほうがいいかもね」コーヒー カップを傾けながら、マリ アンヌが言った。「今日の掃除で、あの人ステンドグラスを磨く担当だから。ほら、あれって高いでしょ？ 誰もしたがらないから」

時計を見ると十一時十分過ぎだつた。マリ アンヌ曰く、教会の大掃除は十三時からはじまるらしい。早いところ神父に連絡をして、代役を見つけてもらう必要があつた。

アルテュールは「コーヒーを飲んでいるロマンを急かし、アレットから絵本を取り上げた。マリ アンヌはクッキーを三人分、それぞれに紙袋に入れて持たせてくれた。

「待つて」玄関を出るときになつて、アレットが口を開いた。「クリストフのお土産は？」

「また今度でいいだろ？」アルテュールはうんざりしたように答えた。

「今日じゃなきや駄目。絶対に待つてるよ」

「マリ アンヌ、今日お店開けられる？」ロマンが聞いた。

「大丈夫だけど クリストフよね？」マリ アンヌはアルテュールを見た。アルテュールはしぶしぶ頷いた。「ちょっと待つていてね。今あの子シリーズものを読んでいるから」

そう言って、マリ アンヌは家の奥に消えていった。

少しして戻ってきたマリ アンヌの手には、一冊の子供向けの本があつた。値段は約八十フラン。アレットは自分の財布から、ルネからもらったであろう五十フランを取り出した。まだ三十フラン足りない。アルテュールも全財産の一十五フラン出したが、残りの五フランが足りない。折角ルネからもらった五十フランを、財布に入れ忘れてしまつたらしい。知り合いといえどもまけるわけにはいかず、マリ アンヌは苦い顔で兄妹を見守っていた。アレットとアル

テュールも次の機会にしようと思つた矢先に、ロマンが残りの五フランをさつと差し出した。

「後で返せよ」財布を閉じながらロマンが言つた。

「ロマン、ありがとう」アレットが微笑んだ。

ロマンは照れくさそうにはにかんだ。マリ アンヌは気を利かせて、鮮やかな色紙で包装してくれた。アレットはそれを大切そうに鞄にしまつた。

マリ アンヌに見送られて、三人は教会へ向かつた。

ジャン フィリップ神父

パッサージュから教会に抜ける道は、舗装されていないむき出しの地面で、雪が降り積もつてぬかるみ、滑りやすくなつていった。アルテュールはアレットが転ばないよう、彼女の手を強く握り締めて慎重に歩いた。

教会は村を十字に区切つた北西部にあるため、パッサージュからは遠くない。マリ アンヌの家を出てからじきに、教会の屋根に掲げられた十字架が、すでに見えていた。

「なあ」アルテュールはロマンをちらりと見た。「お前マリ アンヌが好きなのか?」
「まさか」ロマンは即答した。「何でそつなるんだ」「でもマリ アンヌと話しているとき、すごく嬉しそうだつたぞ」「彼女とは友だちだよ」照れくさそうにロマンが笑つた。「親父や姉貴に言えないことを彼女に相談している」「例えば?」「例えば、女の子との付き合い方とか」「お前彼女居るの?」「居ないよ。でもそういうのは時々で、いつもは人とバンパイアの生き方について メーンストリートに屋根をつける話で少し騒いだだろ?」この村の人とバンパイアの比率が逆転して、混血が多くなつたから屋根をつけましょうってやつ。あれで反対したのはごく少数の純血だけだつたつて話。そこで今どき純血だからと頭を下げて当然、下げられて当然、っていう考えは古いと思う。という自分なりの意見を親父に話したら殴られかねないから、マリ アンヌにしている」

アルテュールはロマンの父親とエリーズは、話が合いそうだと思った。エリーズも混血を嫌悪しているし、人よりもバンパイアのほ

うが、位が高いと考えているからだ。ロマンの父親もロマンや彼の姉に対して、ヒステリックに叫ぶのだろうか。しかしあの温厚そうな村長が、激高する姿なんて想像もできなかつた。

「お互い大変だな」

「お前が言つた」ロマンは片頬をつり上げて微笑んだ。

*

教会ではジャン・フィリップ神父が、礼拝堂へ続く階段を掃いているところだつた。彼がこの村の神父として赴任してから約二十年間経つが、おかげで教会はいつも綺麗な状態を保つてゐる。

神父は足首まである、ロングスカートのよつた黒い服を身につけ、ロザリオを首から提げてゐた。ブランシャール兄妹もロマンも、キリスト教徒ではないため十字架の効果はない。

神父についてはルネがよく話をしてくれるため、どういう人物かは知つてゐたが、こうして神父と顔を合わせるのは今回が初めてだつた。

「おや、珍しいお客様だね」神父は手を止めてにこやかに言つた。微笑んだ際に目じりにいく筋もの皺が寄つた。彼の目がロマン、アルテユール、そしてアレットを見た。ロマンはここに何度か来ているのかもしぬれない。彼に対する神父の目が少し穏やかだつたからだ。

子供たちはそれぞれ挨拶の言葉を口にした。

神父の笑顔には相手の気持ちを落ち着かせる何かがあつた。自分を隠したがるルネが、ジャン・フィリップ神父には包み隠さず全てを話している、という噂はあながち本当なのかもしぬれない。神父のような人が母親だつたら、アルテユールが普段感じてゐる家での違和感も覚えずに済むかもしぬないと、つい考えてしまうほど彼は穏やかな雰囲気を持つてゐた。

それから少しの間、お互に何か言い出すのではないか、という予想をしていたため言葉がなかつた。アルテュールはロマンに小突かれて、ようやく本来の目的を思い出した。

「今日ルネが来られないみたいで、それで」

「そうか、それは残念だ。彼はよく働いてくれるからね よし、代わりを探しておこう。ルネには気にしないよ」と伝えてくれるかい？」

「わかりました」

三人はお辞儀をして教会を後にした。原則としてバンパイアは、教会の礼拝堂内に入つてはいけないという規則があるからだ。混血と洗礼を受けた混血はどういう措置を受けるのか、アルテュールは知らない。

礼拝堂に入りたいというよこしまな好奇心に負けて、アルテュールはルネの代わりに掃除を手伝わせてくださいと、言い出してしまうのを押さえることで必死だった。万が一そうなった場合は、間違いないくロマンが止めてくれるだろうという確信もあった。

神父に別れを告げると、三人は少し遠回りをしてサンクスヌーブに帰宅した。ロマンの暮らす新築のリュベン邸とブランシャール邸は、お互に歩いて十分以内の場所にあった。

ラファラン・デュボア

九月。霧の立ち込めるパリ郊外のバス停で、一人の少年がバスを待っていた。

背が高いため、よく高校生と見間違えられてしまつが、彼 ラファラン・デュボワは今年中学に入学する九歳だ。市内の中学校では今日入学式が行われるが、開式するにはまだ三時間ほど早かつた。ラファランは自分の腰ほどの高さのある、大きな革張りのトランクを体の横にぴったりと立てかけて、右手でその取っ手を用心深く握り締めていた。チェック柄のワイシャツの裾は、アイロン掛けされた紺色のスラックスに不器用に押し込まれていた。健康的な丸顔は、時折吹く冷たい風のせいで頬が紅潮している。こげ茶色の髪は刈り上げて、切りそろえられているにも関わらず、風にあおられるせいか、あるいは癖が強いせいか不自然な髪型になっていた。黒目勝ちのブラウンの瞳は、時々不安そうに左腕の時計を見つめた。

彼の他にバスを待つている客は居ない。

ラファランの叔母夫婦は、自ら進んで彼をバス停まで送る役目を買って出たが、バス停に到着するなり甥っ子を下して、そのまま角を曲がつてどこかへ走り去つてしまつた。ラファランは一人がどこへ行くか知つていた。人気のカフェテリアでモーニングコーヒーを飲むのだ。叔母夫婦について日ごろからあまりよく思つていなかつたため、今更失望もしなかつた。

時刻表通りならば、あと五分後に到着するだらうバスに乗つて、ラファランはアンナ・ヴェシェール学園に向かうことになつっていた。アンナ・ヴェシェール学園はドイツのギムナジウム形式をとつており、十歳から十八歳までの八年間、教育を終えるまで、生徒は全員寄宿舎で共同生活をするという決まりがあつた。一人っ子のラフ

アランにとつて、同世代の子供たちと生活することは、言うまでもなく初めての経験だつた。世間一般では名門として知られる学校だが、父親が教育熱心だつたため、幸いにもラファランは小学校で成績不振で悩んだことはなかつた。デュボワ氏は息子を政治家にしたがつていた。

デュボア夫妻は幼馴染だつた。夫はパリの大学で、古典文学とは何たるかについて教えることが仕事だつた。一方夫人は図書館で司書をしていた。古代ギリシア文学をきっかけに意気投合した二人は、その半年後に婚約した。ラファランが生まれたのはその翌々年のことだ。

デュボワ氏は、毎朝剃る髭の本数まで数えていそうなほど几帳面な性格で、その尖り過ぎた顎と細い眼鏡から想像する通り、神経質な面も持ち合わせていた。ラファランが父親といわれて真っ先に思い浮かべるのは、「どうだ、しつかりやつていいか」という彼の口癖だつた。ラファランはその度に、小学校でした悪戯を思い出しながら、しかし父親に悪事を悟られないように気をつけながら、「もちろんです」と真顔で頷くのだった。父親を堅苦しく思うときもあつたが、同時に世界中で一番好きな大人の男でもあつた。なぜそう思うのか理由はわからない。

*

時刻表から遅れること十分、ようやくバスがやつてきた。
ロータリーでその大きな車体を旋回させ、徐々に速度を落とし、
バス停の前で停車した。

ラファランはステップを一段一段登つて、重いトランクを乗り入れた後、ジャケットのポケットからあらかじめ買っておいた切符を取り出した。運転手は人の良さそうな笑顔で切符を切つた。

出勤時間には早いようで、大人は数人しか乗つていなかつた。ざ

つと車内を見た限り、労働者ふうの、体格の良いオイルの臭いのする男。販売店員ふうの、接客好きそうな身なりの整った若い男。地方からやって来たらしい、余所行きの服を着た大荷物を抱えた中年の女。子供は大きなトランクを抱えて病人のような顔色をした、ライトブラウンの髪の少年ただ一人だけだった。彼は一人掛けの椅子に一人で腰かけていた。

ラファランは迷うことなく少年の座っているすぐ前の列に腰を下ろした。クッションは固く、椅子ではなく、薄い絨毯を敷いたフローリングの上に腰掛けているようだった。

バスはラファランの慣れ親しんだ通りを抜けて行った。彼は見慣れない景色に対して興奮したが、同時に寂しい気持ちにもさせられた。

マリウス・ハルフォール

ラファランが乗車してから十五分ほどが経ち、乗っていた大人たちが職場近くで下車すると、賑やかだった車内は真夜中のように静まり返ってしまった。小学校ではいつも喧騒の真っ只中にいたラファランにとって、この沈黙は耐えがたいものだった。

ラファランが前触れもなく、突然後ろを振り向くと、少年は驚いたように目を見開いて、無愛想にならない程度に口元だけ微笑むと、ぎこちなく視線を逸らした。

「やあ、寒いね」ラファランは出来る限り、明るい声色で言った。
「そうだね」少年は、注意しなければ聞き取れないほど小さな声でそつけなく呟いた。声色も暗かつた。

肉付きがよく、背も平均より高いラファランに比べて、少年は小柄で少女のように華奢だった。一言で例えるのならば、味気が無くぱさぱさとしたスコーンだ。着ている服も古着屋で買ったような、使い古されたものだつた。ジャケットは毛羽立ち、帽子からはほつれた糸が飛び出していた。薄い色素のせいで眉とまつげはほとんど見えず、顔の窪みに突然黒目があるようだつた。耳は大きく、帽子を被つても十分存在感があつた。それにしても、どこか痛そうに顔をしかめているため、その脣からはフランス語ではなく、流暢なイギリス英語が聞こえてきそつた。

ラファランは彼の横顔をじつと見つめた。学校への距離はそう遠くは無いが、始終無言でいられるほど近い距離でもない。この少年が喋り出しあえしてくれたら良いのだが、話しかけでもしない限り口を開きそつにはなかつた。

「君も学校に行くの？」ラファランは思い切つて聞いてみた。この時間帯に乗つてているということは、少年の向かう場所が学校がパリからさほど遠くはないということだ。

「そうだよ」少年のヘーゼル色の瞳がラファランを見た。「君は？」

「アンナ・ヴェシェールに」

「僕もだ」少年は薄幸そうな顔で微笑んだ。そしてさつきよりも元気な声で言った。「僕はマリウス・ハルフォール」

「ラファラン・デュボア。よろしく」ラファランは背もたれ越しに右手を差し出した。

沈黙の登校は避けられそうだと、彼は心中で一息ついた。マリウスはラファランの差し出した右手に、ためらいがちに自分の手を重ねた。マリウスの口角を少しだけつり上げる笑い方は、まるで女子の子のようだった。

両足の間に、まるで骨董品店にでも置いていそうなほど年季の入ったトランクを挟んでいる。十歳そこそこの子供の持ち物にしては、いくらか渋すぎるデザインだ。

「悪さをしたら鞭で打たれるぞ、って兄さんが言つんだ」兄の口調を真似してマリウスが言った。

先ほどよりも表情は明るく、ラファランともすっかり打ち解けていた。ラファランはマリウスの鞭を打つジェスチャーを、何度も繰り返し真似してはその度に笑い転げていた。

「君の兄さんもアンナ・ヴィシェールに？」ラファランは涙を拭いながら訊ねた。

「ええっと」マリウスの皿線が宙を泳ぎ、自分の親指に留まつた。「兄さんはレストランの皿洗いをしているよ。いつもコックと喧嘩して帰つてくるんだ」

「勝つの？」ラファランは興味津々だった。

「そんなに強くないから 昨日なんて夕食後に帰つてきて、また青あざを作ってきたから、姉さんがかんかんで口論してたよ」

「姉さんもいるのか？」

「うん、二人ね。……あと弟と妹がいる」マリウスはまるで家の恥を口にするかのように、自嘲気味に笑つた。「すごく貧乏だけど」

「六人兄妹か。いいなあ。マリウス、俺一人っ子なんだよ」

「僕は一人っ子がうらやましいよ」拳動不審にトランクの持ち手を弄りながら、運転席を見つめて言った。「ラファラン」

「まあ、人それぞれだな」

「そうだね」

*

ふと車窓を見ると、腹の出た背の高い中年男性が犬の散歩をしている姿が見えた。急いでいるのか、心なしか早歩きをしている。時々誰かに呼びかけるように口を開く彼の先には、オフィスに向かうのだろうか、ブロンドの髪を高い位置で結んだ、パンツスース姿の背の高い若い女性が歩いていた。

一人が歩いているのは、交差点に面した店舗の立ち並ぶ通りで、開店準備をしている店も多く見られた。信号の手前の歩道で、向かいの通りに行くために、大勢の人びとが地下へ続く階段を下つている。

一人の男女は親子だった。夫婦にも見えなくはないが、おそらく親子だろう。女性は怒った様子で早歩きをし、男性の方はいつの間にか諦めて、うなだれてゆつくりと歩いていた。散歩をしている犬は黒い短毛の中型犬で、どうやら雑種らしい。耳が垂れた尻尾の長い犬で、時折飼い主を心配するように男性の顔を覗き込んでいた。

二人を見ていると、ラファランは急に胸が苦しくなるのを感じた。この先クリスマスまで両親に会えないのだ。悪戯をする際に、父親の目を気にする必要はなくなつたが、彼の代わりに叱つてくれるのは、他人である教師か、生徒代表の上級生のどちらかになる。家を出る際に母親が強く抱きしめたのは、そういう意味もあつたのかと思うと、もう少し別れを惜しむべきだったと後悔した。

バス内部の電光掲示板が、「アンナ・ヴィシエール学園前」を示したのと同じ頃、バスの運転手が「坊ちゃんたち次かい?」と声を

かけてきた。もちろん後ろを振り返るわけにはいかないため、バッタミラー越しでの会話だった。

「そうだよ」ラフアランが答えた。「あどどのくらいで着くの?」

「五分ぐらいだな。新入生か? がんばれよ」

じきにバスは「アンナ・ヴィシェール学園前」で止まった。

バス停があるのは学校の丁度横で、正門がある通りまでは短く見

積もつても三百メートルはあるかのようと思えた。

正門は角を曲がった先にあるため、直線の三百メートルと、角を曲がつてから正門までの約百メートルを合わせると、少なくとも四百メートルは歩かなければいけないだろう。

バスの運転手に別れを告げると、ラファランとマリウスは、トランクを引きずつて正門に向かつた。時々上級生らしき男女が挨拶をしてきた。ラファランは威勢よく挨拶を返したのだが、マリウスはやはり控えめな挨拶をした。

新入生らしき姿も多く見られたが、そのほとんどが親に付き添われていた。むしろラファランやマリウスのように自分たちだけで校門をぐぐる新入生の方が珍しかった。

「『アンナ・ヴィシェール学園前』って、ちつとも前じゃないよね」マリウスが口を開いた。

彼のトランクは、今にも分解してしまいそうなほどぼろぼろで、縫い目がほつれて中身が見えていた部分もあった。キャスターはもはや役割を果たしておらず、しかし引きずるわけにもいかないため、マリウスは自分の身長の約半分の高さのトランクを、その細い腕で抱えて運んでいた。彼の顔は紅潮し、それによつてそばかすがより強調されていた。

「誰だつて誤解しちゃうよ」息をつきながらマリウスは続けた。誤解を与えやすいバス停の表記に、この広い世界で最も腹を立てているのは彼のようだ。『『アンナ・ヴィシェール学園前』よりも『アンナ・ヴィシェール学園横』とかさ。あるいは、『（ただし正門まで距離があります）』とかにするべきだよ もうー どうして取つ手が取れるかなあ』マリウスは大きなため息をつきながら田をぐるりと回した。

ラファランははじめ、マリウスの家が貧乏だという話を、衣食住は不自由なく出来るが、突然の高い買い物は出来ない程度のものだと思っていたが、彼のトランクの惨事を見る限りでは、どうやら思つていたよりも事態は深刻らしい。マリウスは学費の掛かる私立のアンナ・ヴィシェール学園に通うよりも、地元の公立学校で義務教

育を終えてすぐにでも就職したほうが、自分をはじめとする家族の首を絞めずに済むのではないかと、他人の家のことながら考えてしまった。

「手伝おうか?」ラファランはマリウスの傍に駆け寄った。
「ううん、大丈夫。何とかなると思う」そう言つたマリウスの顔は、今にも泣き出しそうだった。「先に行つてもいいからね」そう言つた時に、マリウスよりも背の低い、黒髪の少年が先を追い越していった。

「置いていくわけないだろ?」ラファランはむつとして少し乱暴な口調で言つた。「とりあえず道の隅に寄る?」

マリウスのトランクを抱えて道の隅に寄ると、ラファランは自分のトランクを開けて、そこにマリウスの荷物を押し込んだ。家を出る前に詰め込んできた、雑誌や菓子や煙草やらが底の方で潰れたような音を出したが、それでもラファランはお構いなしにマリウスの擦り切れたシャツや下着や本を押し込んだ。マリウスのトランクのほつれは、最大で紙幣ほどの大きさがあつたため、そこから出ない大きさの靴やスラックスや辞書などを除く全てが、ラファランのトランクに詰め込まれた。

今にもはち切れそうなトランクを引いて、ラファランとマリウスは再び歩きはじめた。

*

「必ず手紙を書いてね。週に一回は必ずね」しばらく歩いていると、後ろから女性の声が聞こえてきた。「何かあつたらすぐに先生に言つよ。もう、お母さん心配だわ。悪い友達に駄されちゃ駄目よ。アルテュール、あなたは本当に優しくていい子だからちゅ、という音が二回。

おそれらしく新入生とその母親なのだろう。しかしそれにしても、まるでドラマに出てくるような親子だ。むず痒くなつて笑うのを堪え

きれなくなつた、ラファランがマリウスを振り向くと、彼はまるで悪いことでもしていたかのよう、慌ててそっぽを向いてしまつた。「少しおかしいな、マリウス」ラファランは耳打ちをした。

「僕が？」口をぽかんと開けて、マリウスは目を見開いた。

「違う。後ろの親子だよ」

そう言つと、マリウスは無神経にも振り返つた。ラファランが肝を冷やしたのは言つまでもない。まだバスを乗り合わせただけの仲だつたが、ラファランは彼が纖細なのががさつなのか判断しかねていた。それでも、時折見せる儂い表情が、憂いを帶びていることは確かだ。それともそれはイギリス人に似ているせいだろうか。

「どうだつた？」前を向いたマリウスに、ラファランはすかさず尋ねた。親子の会話 母親の一方的な言葉はいまだに続いていた。

「言葉に出来ない」よほど感動的だつたのか、マリウスの声は掠れていた。「 いいから見てみて

一度も振り返るのは失礼に当たるかもしれないと思つたが、それでも好奇心が勝ち、ラファランは振り返ることにした。チャンスは一度だけ 標識を確認する振りをして振り返つた。

「どう？」

マリウスの問いかけに、ラファランはただ頷くだけしか出来なかつた。先ほど見た映像を、頭の中でもう一度描いてみる。それは決して鮮明ではなかつたが、興奮はむしろ高ぶる一方だつた。

白い肌によく似合つぐすんだブロンドの髪、青みがかつたグレーの瞳。少し厚めの唇に、やや下を向いているものの、彫刻のように非の打ち所のない形の鼻。一つ一つ思い出す度に、ラファランは自分がホモセクシャルだつたのかと疑問に思つてしまつほど胸が高鳴つた。高飛車そうな顔立ちだつたが、彼がもし女だつたのなら、きっと一目惚れしたに違ひない。ラファランはその一瞬のうちに、アルテュールという少年が、実はとある有名な映画スターの隠し子で、彼の顔は美しかつたのだ。隣を歩いていた彼の母親も彼と同じく

くすんだブロンドで、美しい顔立ちをしていたが、それでも彼の足元には遠く及ばなかつた。

「アルテユール」マリウスがそつと呟いた。

彼の名前はわが国を代表する、かの有名な詩人、アルテユール・ランボーと同じ名前だ。何度も彼の名前を呟いているマリウスは、ラファランよりもっと強い気持ちで、アルテユールと友だちになりたいと考えているに違ひなかつた。

アンナ・ヴェシェール学園

アンナ・ヴェシェール学園は今から約一五〇年前に、ジャン・ヴェシェールが女子の学力と社会的立場の向上を目指して創立した私立の学校である。アンナとはジャンの妻の名前で、彼が四十二才でこの世を去るまで、学長は夫婦一人が務めていた。

ちょうど五十年前に男女共学になり現在の学園の形となつたが、その名残で生徒の比率は女子が六割とやや多く、男子トイレの数も生徒数に比べると少なかつた。

校門をくぐると、正面 ちょうど管理棟の目の前の花壇の中央に、二人寄り添つたヴェシェール夫妻の銅像が立つており、どんなに鈍い来校者が訪れても、その姿を見つけられるようになっている。雨や錆で多少浸食されているものの、二人の穏やかな微笑みは銅像が建てられた十年前と全く変わることがなかつた。銅像やこの学校を見て分かるとおり、ヴェシェール夫妻はおしどり夫婦として知られていた。だから、この二十年もの間に、女子生徒たちの間ではこの銅像の前で恋人とキスをすると、一生結ばれるというジンクスが出来たほどだ。

しかし、ラファランとマリウスの二人は、ほかの新入生たちのように、校門をくぐつてアンナ・ヴェシェール学園に入学できることを噛みしめたりするどころではなかつたため、夫妻の銅像には目もくれず、学生寮をひたすら目指していた。

*

「一年生は管理棟前に貼つてある部屋割表で、自分の部屋を確認すること」小柄で眼鏡を掛けた男性が声を張り上げた。「荷物を部屋に運んだら講堂に行きなさい」

管理棟前は一年生と思わしき生徒で、文字通り「」たがえしていた。プロンド、ジンジャー、ブラウン、ブルネット、ブラック、様々な頭が自分の部屋を探していた。

ピアスをしている子、背伸びをして化粧をしている女の子、太っている子、瘦せている子、背の高い子、低い子。

部屋が見つけられないのか、今にも泣き出しそうな顔で、先ほどの男性教員に尋ねている黒髪の女の子もいる。

ラファランはすぐにマリウスの名前を見つけたが、隣にいたはずのマリウスは、いつの間にか見たこともないプロンドの太った男の子と入れ替わってしまっていた。ラファランは『マリウス・アレクサンドル・ハルフォール・東塔三十一』という文字を覚えようと、何度も声を出さずに唱えた。

ラファランが自分の部屋と名前を見つける頃には、他の生徒はすでに部屋を見つけたらしく、はじめに管理棟に集まっていた人数の半分以下に減っていた。

マリウスの荷物が半分入ったキャリーケースを引きずりながら、ラファランはこの先自分の家となる、東塔三七を探した。

*

東塔の三階に上ると、新一年生の男子生徒たちは、寮の廊下で集まつてお喋りをしていた。部屋に向かう途中で聞こえる声から、それらは同じ小学校の友だち同士や、今回の部屋割で同じ部屋になつた同士などなど様々だった。それぞれ部屋のドアに、部屋の番号を示したプレートが貼つてあった。三十一と掲げられた部屋はドアが閉まっていたため、中の様子を見ることはできなかつた。

三七は階段の隣に位置していた。誰が居るのだろうかと、期待に胸を膨らませてドアを開けると、そこに居たのはくすんだプロンドに、青みがかつたグレーの瞳をした少年。先ほどのアルテュー

ルだった。

ラファランはドアを閉めるのも忘れて、部屋に足を踏み入れた。

部屋には左右に一床ずつベッドが壁に沿って置かれており、枕は廊下側に向けられていた。部屋に入つて後ろを振り返ると、枕元にコートやジャケットなどを掛けるのに具合のよさそうな細長いクローゼットがそれぞれあつた。壁はペンキだつたが、この部屋を使つた先輩たちにより、ところどころ白色に禿げ上がつていた。塗り替えるのは校則違反なのだろうか。ベッドの足元にある小さなテーブルには、アルテュールのものと思わしき上着がすでに掛けられていた。ドアと丁度向かい合う位置に、ラファランの頭とほとんど同じ高さの窓があり、そこからグラウンドを一望することができた。窓にはレースのカーテンが掛けられている。窓に向かうようになして学習机が一つずつ置いてあつた。窓の幅は机がちょうど一畳おさまる大きさだった。その窓を中心に左右がそれぞれの部屋になるらしい。

ラファランは膨れ上がつたトランクを右側の壁に立てかけた。心なしか部屋が全体的に土臭かつた。

「俺はアルテュール・ブランシャール」横柄で言葉の端々に棘を感じるような言い方だつた。「お前誰だ？」

「ラファラン・デュボア」ラファランはアルテュールとは対照的に、友好的な口調で答えた。横柄なアルテュールの態度が瘤に障つたが、会つて早々喧嘩するわけにはいかない。

「俺のはこっちでいいよな?」アルテュールは右側のベッドを指差し、ラファランの同意も聞かず続けた。「それからあまり音を立てるなよ。静かにしている。俺の物に触つたら容赦なく追い出してやる。あとは」

アルテュールの言葉はもはやラファランの耳には入つていなかつた。きっとこの部屋における王者は、自分であるということを喋つてゐるのだろうが、そんなことはどうでもよかつた。ラファランは、

アルテュールの青白い顔をまっすぐに見つめながら、一体どうすれば彼を黙らせることができるか、それだけを考えていた。この映画スターの隠し子は、自分が特権階級なのだと勘違いしているのだ。親の七光りのくせに。

「 おい」とラファランが呼びかけると、アルテュールは口を閉じて呼ばれた方を向いた。ラファランのダークブラウンの瞳と、彼の青みがかったグレーの瞳がかち合つた。「ママが居なくても寝られるのか？」

色素の薄い眉がひそめられ、グレーの目が細くなり、青白い頬がぴくりと上下すると、アルテュールは おそらく利き手なのだろう 左手に握りこぶしを作つた。ラファランは頬骨に直撃した衝撃で、鼻骨が僅かに振動したのを感じた。足を踏み外したのは、青白い顔を桃色に染めたアルテュールの顔を見てからだつた。

ラファランは世間一般的に、相手を罵る際に口にする下品な言葉を吐き捨てる、アルテュールの襟元に飛び掛り、彼をワックスが掛けられたばかりのフローリングへと押し倒した。背中を打ちつけたせいでアルテュールの口から息が漏れだが、お構いなしにラファランは、彼のその嫌味なまでに整つた頬に右の拳を打ちつけた。二人にとって、アンナ・ヴェシェール学園で過ごす八年間はもう決まつたも同然だつた。

アルテュールは馬乗りになつているラファランを押しのけようと、散々な悪態を吐きながら、膝と腕で応戦したが、ラファランはアルテュールの櫛の通された、くすんだブロンドの髪を左手で持ち上げ、四度目の拳を打ち込もうとした。

「何をしているんだ！」少年の掠れた声が部屋に響いた。「二人とも離れて壁に背をつける！」

お構いなしでラファランは最後の一発としてアルテュールを殴つた。すかさず両腕を掴まれ、ラファランはアルテュールから引き離され、壁に背を打ち付けられた。腕を掴んでいたのは、背が高く黒

い髪をした男子生徒だった。顔の作りからしてどう考へても同級生には見えない。腕には「学年代表」を表す腕章をつけていた。

「君も早く」上級生はラファランを壁に押し付けたまま、顎でアルテュールに壁に立つように促した。「原因は?」

ドアの周りには人だかりが出来ていた。男子寮の塔であるため、当然のことながら女子生徒は居ない。ラファランはその中にマリウスの姿を見つけた。背が低いせいで、中の様子が伺えないでいるらしい。ライトブラウンの髪が上下に跳ねていた。

「こっちを向くんだ」男子生徒がラファランに呼びかけた。「原因は何だつたんだ?」

「知らない」ラファランはうんざりした口調で答えた。「知つているほど冷静なら、こんなことにはならないだろ」

「君は? 怪我は無い?」上級生は聞こえなかつた振りをしてアルテュールを見た。

「黙れ、構うな。失せろ」

上級生の顔はみるみるうちに赤くなつていった。ラファランは勝手にやつてると心の中で唾を吐いた。

「入学式が終わつたら寮長室に行くんだ。わかつたな? 今回は初めてだから寮監たちには黙つておくが、次はないと思えよ」

ラファランは返事をしなかつた。上級生がアルテュールの方を見たため、彼も返事をしなかつたのだとわかつた。上級生は一人の新入生を気が済むまで睨みつけてから、襟元を正して大きな足音立てて部屋から出て行つた。彼はこの部屋の新入生たちに対するいら立ちを、人だかりに向かつて「解散しろ!」と叫ぶことで発散させたようだつた。

そして、ようやく男子寮の新入生たちは、本来の目的だつた講堂に行くことになつた。

人だかりが解散しても、マリウスだけはドアの前で留まつていた。アルテュールは部屋を出る際にわざとラファランの肩にぶつかつ

たが、ラファランは深呼吸して彼を殴ろうとした右手の拳を開いた。ラファランが廊下に出る時には、アルテュールは階段を上つて渡り廊下に差し掛かっていた。

「マリウス、久しぶり」ラファランはマリウスの肩に手を置いて言った。「探したぞ」

「僕もだよ」マリウスは肩をびくりと上下させながら微笑んだ。

「後で荷物持つて行つてやるよ」

「ありがとう」そう言つと、マリウスは周囲に人がいないか確認して、声を潜めた。「それにしても驚いたよ。だってラファラン、君があのランボーと殴り合つているんだから」

「先が思いやられるな」ラファランは首を振つてマリウスの言葉を遮つた。

ほとんどの生徒たちが講堂へ移動する中で、マリウスは筆記用具を取りに三七の部屋に戻った。

講堂へは階段を下りて渡り廊下を渡り、さらに階段を下りなければいけなかつた。女子寮は男子寮とは違い、講堂の近くにあるため、こんな長い道のりをしなくても済むのにだ。

階段はリノリウムで覆われていた。踏み段の角に滑り止めが貼つてあるのは、まだ幼い新入生たちを転落させないためだらう。壁はペンキで塗られていた。こちらは部屋のペンキとは違い、ひび割れ一つなくとてもきれいだつた。しかし一度もたれてしまふと表面に噴き出した白い粉が服に付いてしまい、なかなか取れなかつた。マリウスは知らずにもたれかかつてしまい、渡り廊下にさしあたるまでの道のりで、相当いらついた様子で払い落としていた。

渡り廊下は男子寮と授業などで使う教室を繋いでおり、二階に当たる高さがあつた。そこからは、右手には女子寮のベランダや裏庭の花壇、左手には広いグラウンドを望むことができたが、窓のさんにハエやクモが死んでいるのを見つけてしまつたため、青空に輝く太陽と盛り上がつていた気分は一気に下降してしまつた。

渡り廊下を出てすぐの階段を下りた一階が講堂だつた。

講堂はワックスの掛けられた板張りの広い部屋で、上座にある場所には演説の際にでも使うのだろう、低いが立派な舞台があつた。

*

講堂にはすでに百以上の生徒たちと、十人以上の教員たちが居た。ざわついており、何度静かにするよつて言われても、声は一向に収まらなかつた。

女子生徒はそれぞれ、三人から四人のグループを作つて集まって座つていた。ラファランとマリウスは一緒に後ろの方に座つた。先に到着していたアルテユールは、中央あたりに一人で腰を下ろしていた。

少し遅れて、上級生四人がやつて來た。男子生徒と女子生徒が二人ずつで、その中には、先ほど寮でラファランを壁に押さえつけた男子生徒も混じつていた。ふくよかな中年の女性教員が、彼らに近づいて舞台を指差しながら、なにやら説明をはじめた。何についての説明かは声が聞こえなかつたためわからない。

講堂のワックスの臭いに顔をしかめつつ、ラファランはマリウスと天井の染みや、個性的な外見をした教員についておしゃべりをした。

「顔、青あざができるぞ」突然、目の前に座つていたブルネットの男子生徒が振り返つた。「はい、これ」彼は一組のプリント用紙を差し出した。

「本当?」ラファランは受け取りながら聞き返した。

「目の下にね」彼は自分の右頬骨あたりを触つた。

「どう?」プリントをマリウスに配りながら、彼にも聞いてみた。

「うん、あざになつてる」マリウスはプリントに目を落としながら、ラファランの顔を見ずに答えた。「そこまで青くないけどね」

「それにしても、君すごいんだな」

男子生徒がラファランの顔をまじまじと見つめ、何度も頷きながら言つた。ラファランははじめそれが何のことかわからなかつたが、すぐにアルテユールとの殴り合いの喧嘩のことだとわかつた。

「すごくなんかないよ」ラファランはプリントに目を落とした。『

アンナ・ヴィシェール学園によつこそ!』と書かれてある。

「兄さんがここ六年生だけど、入学早々殴り合いの喧嘩なんて聞いたこと無いと思う!」

「とにかく落ち着けよ

名前は?」

「僕？」男子生徒は嬉々として答えた。「ラウル・ミシェル・ドービニエ。ああ、君の名前は知っているよ。ラファランだろ？」「ラウル・ミシェルはラファランに微笑みかけると、マリウスを見た。

「君は？」

「マリウス」マリウスは右手を差し出して微笑んだ。「よひじく、ラウル・ミシェル」

握手を交わした直後、小柄で眼鏡をかけた男性教諭が近づいてきて、ラウル・ミシェルとマリウスの頭を小突いた。

「君たちって同じ部屋なの？」教諭が遠ざかって行つたのを確認するなり、ラウル・ミシェルが懲りずに訊ねた。

「違うよ」ラファランがアルテユールを見ながら答えた。「俺はあいつと一緒に

「そう、マリウスは？」

「あれ」マリウスは左斜め前に座つていて、小柄な黒髪の少年を指差した。「ジャン・ポールと一緒に。ラウル・ミシェルは？」

「あいつ」フィリップ・顔をしかめながら、ブロンンドで太り気味の男子生徒を指差した。

フィリップと指を差されたブロンンドの少年は、同級生とは思えないほどとても太っていた。それだけでなく陰湿な雰囲気を醸し出している。

「ご愁傷様」ラファランが上辺だけの微笑をした。

「できることなら、殴り合つて別の部屋にしてもらいたいよ」ラウル・ミシェルがラファランを見た。

「今回は初犯だから、教師には黙つておくんだってさ」

「じゃあ次以降なら望みがあるわけだ」ラウル・ミシェルはにやりと笑つた。

「お前、他人事だからって」ラファランはわざと大きなため息を吐いた。「険悪なんだぞ。事態は深刻だ」

ふと隣のマリウスを見ると、教師の言葉を一字一句聞き逃すまいと、ほとんどの生徒が聞いてはいないだろう話に、真剣に耳を傾け

ていた。ラファランは、まだ話しきりなそうなラウル ミシェルに、指をさして前を向くように促した。

*

ふくよかな中年の女性教諭が舞台に上った。それに続いて四人の上級生たちも舞台に乗った。

女性教諭は学校の制度や校則などについて、四人の見本を例にしてほんと聞いていなかつた。なによりも、彼女たちの言つていることは手元にある配られたばかりのプリント用紙に書いてあるため、後で確認しても同じことだ。しかし、やはりマリウスは熱心に耳を傾けていた。ほとんどの生徒が疲れて眠りかけているというのに、彼だけはメモまで取つていたからだ。

ラファランは退屈そうにプリントを手に取り、選択科目と必須科目の項目を読んでいた。公立学校でもこれほどの勉強をするのだろうか。

「今何の話してんだ?」ラファランが訊ねた。

「部屋番で教室が決まるんだってさ」マリウスはいきさか早口で答えた。

「うわあ。最悪だな、それ」ラウル ミシェルがラファランの脇腹を小突いた。ラファランは舌を出して返事をした。

「学年代表は各学年に男女一人ずつ選ばれます」女性教諭が声を張り上げた。「四年生と八年生の学年代表は特に重要な役を任せます。私の隣に並んでいる彼らがそうです では、呼ばれたら前に出てきてください。ミレイユ・コストレ!」遠くに座っていた女子のグループから小柄で赤毛の女の子が立ち上がった。「ラウル ミシェル・ドービニエ!」

「はあ?」ラウル ミシェルは信じられないという表情をしていた。

「ラウル ミシェル・ドービニエ、こちらに来なさい」女性教諭が

もう一度大きな声で叫んだ。

「まじかよ」ラウル ミシェルは頭をかきながら、とても面倒くさそうに舞台の方へと歩いて行つた。

女性教諭は一人を指しながら言つた。「これからは、何かあればこの一人を通じてお知らせします。ですが、代表と言つてあまり負担を掛けないようにしてくださいね。さあ、帰つてよろしい」教諭は一人の背中を押した。

「まさかお前が学年代表なんてね」ラファランはラウル ミシェルが戻つてくるなり横腹を小突いた。

「僕だつて思いもしなかつたよ」ラウル ミシェルは顔をしかめた。誰だつて面倒な学年代表なんてやりたくないに決まつていて。「ところで、すごく熱心に話を聞いていたね。マリウス

「え?」

マリウスは勢いよく振り返つた。ラウル ミシェルが反復すると、彼は「そうだね」とだけ呟いた。ラウル ミシェルはまだ何か言つたそうだったが、結局何も言わずに口を閉じた。マリウスが誰にも踏み込むことのできない、口角をつり上げただけの、形だけの微笑みを浮かべたからだ。

ラファランは解散して講堂に向かう新入生の中で、またしてもアルテュール・ブランシャールを見つけてしまつた。背は決して高くなく、他の平均的な男子生徒の身長と同じだったが、他の生徒には無い存在感が彼にはあつた。相変わらず顎を少し上に向けた、高慢そうな態度をしている。彼の頬にあるかすり傷はラファランがついたものに違ひなかつた。

ソレンヌへの手紙

アンナ・ヴィシェール学園の新学期がはじまって、丸一か月が経とうとしていた。

十月になり雨が多くなり、生徒たちは廊下やフリースペース、あるいは部屋で過ごす時間が多くなった。勉強などのストレスを運動で発散することが出来ないため、頻繁に喧嘩や騒ぎを起こすようになり、それらの問題処理に追われた学年代表たちは、毎日疲れた表情を浮かべて食堂にやって来るのだった。

ラファランとアルテユールは入学式の一件以来、一言も言葉を交わさなかつた。今でこそ顔を合わせたとしても、お互いに平生を保つことができたが、入学の晩や翌日の朝食時なんてものは、二人も、周囲の一年生たちも、いつ火花が吹き出るのか冷や冷やしていたものだった。

マリウスはおそらく学園一番の勉強家だった。他の生徒たちが、グランドでサッカー や キャッチボールに講じている間、彼だけは時間を見つけては図書館へ行き、授業の予習と復習をしていた。ラファランは彼の勉強ノートを見たことがあつたが、気が遠くなるほど細かい字でびつしりと書き込まれていたのを覚えている。ラファランは彼をそれほどまでに勉強に向ける理由が知りたかったが、マリウスはいつも、異性のアプローチを曖昧に微笑んで受け流す、年上の女性のようにはぐらかすのが上手だつたため、とうとう聞き出すことができなかつた。

一年生の学年代表のラウル ミシェルは、男子寮のリーダーそのものだった。学年代表としての忙しさもあって、本人は他に適任がいると常に嘆いていたが、彼以外に適任者はいなかつた。頭の回転が速く、人望もあり、彼を憎んでいる人は誰も居ないと思えるほどだった。しかしそんな彼にも悩みはあつた。同室のフィリップだ。

ラウル ミシェルはラファランとマリウスに会うたびに、彼がいかに陰気で付き合いが悪く、自分勝手なのかについて力説した。フイリップの性格についてはほとんどの生徒が知っていたため、あまり驚かなかつたが、あのラウル ミシェルに嫌われるということは、いじめはもはや周囲の問題ではなく、フイリップ自身の問題だとはつきりしたも同然だつた。

休日だけは、生徒たちは学校の敷地から出てもいいことになつていた。当然門限は決まつていたが、木曜日までにリストに名前を書き忘れさえしなければ、教員たちに特に叱られることもなかつた。ラファランははじめのうちはマリウスを外に誘つていたが、彼が首を縦に振らないとわかるなり、そういう行動をぴたりと止めた。彼は休日の朝は点呼が終わるなり、真つ先に部屋を出て彼の部屋に向かつた。休日のほとんどをベッドに寝転がつて本を読んだり、嫌いな教師の悪口を言つたり、時々顔を出すラウル ミシェルと、くすぐりあつたりして過ごした。マリウスは時々教科書を閉じておしゃべりに参加したが、それでも一週間のうち、一度も休まずに全ての時間を勉強に費やすのは少し異常だつた。

「マリウス、たまには外に来いよな」

ラウル ミシェルのフイリップに対する不満を早々に打ち切つて、ラファランが言った。

最近ラウル ミシェルは相当ストレスが溜まつているのか、口を開くたびにフイリップの不平ばかりを言つていた。一人が喧嘩をして部屋を分かれさせられるのは、時間の問題ではないかと思えるほどだ。

「うん、そうだね」マリウスは上の空で返事をし、また教科書を開いた。「考えておくよ あ！」

教科書から一枚のわら半紙が落ちてきた。それはひらひらとラウル ミシェルの足元に落ちた。彼は迷うことなくそれを拾い上げ、書かれている数行の文章に目を落とすことなく、マリウスの顔色を

伺つた。マリウスの表情次第で読むべきか、読まざるべきかを判断するつもりらしかつた。

「返して！」

マリウスは目だけを動かして、一瞬ラファランを見るなり、すぐさまラウル・ミシェルに目線を戻し、必死の形相で叫んだ。声は掠れていた。ラウル・ミシェルは何も言わずに、文字が書かれていい方を表にして、マリウスに返そうと差し出した。

「マリウス」ラファランが穏やかな声で呼びかけると、マリウスの体は拳動不審者のようにびくりと跳ね上がつた。「お前が書いたのか？」

「何が？」マリウスは俯いていた。

ラファランはラウル・ミシェルからわら半紙を取り上げ、淡々と詩を読み上げた。読み上げている間、マリウスの顔は瞬く間に赤く染まつていき、髪では隠しきれない大きな耳まで真つ赤になつていた。ラウル・ミシェルは何度かラファランを止めようとしたが、そのうち詩に聞き入つてしまつていていた。

「最悪だ」マリウスが呟いた。「最悪。まさか読むなんてひどいよ、ラファラン……」

「最悪でも、ひどくもない。良い詩だ」強い口調でラファランが言った。「親父が読んでいるギリシア古典なんかよりも、ずっと良い」

「ラファランに同じく」ラウル・ミシェルはラファランに負けない程、はつきりとした声で言つた。

「ありがとう」マリウスは誰とも目を合わせずに微笑んだ。「

でも、ジャン・ポールが勝手に読んだ時に言つたんだ。氣味が悪い、つて。お前は本当に男なのか、つて」

「殴つてきてやろうか？」ラファランがすかさず言つた。

「あとが気まづくなるよ」マリウスは首を振つた。ラウル・ミシェルがくすりと笑つた。

「他には無いの？」ラウル・ミシェルは身を乗り出すよつて、ベッドサイドからわざかに腰を浮かせていた。

「何が？」マリウスはラウル ミシェルを振り向いた。「ジャンポールに対する不満？ 彼とつても素敵な人だからね。たくさんあるよ」

「違うよ。詩だよ」

「あるにはあるけど、ないよ」教科書にわら半紙を閉じて、マリウスは首を振った。「恥ずかしくて見せられない」

「せいぜいソレンヌに読まれないことだな」ラファランが悪戯っぽく笑った。ハ重歎がちらりと見えた。

ラファランは冗談のつもりで言ったのだが、マリウスは諦めが混じったため息を吐きながら、「そうだね」と答えただけだった。ラウル ミシェルも不思議に思つたようだ。彼と目が合つと、ラファランはわからないといった様子で肩をすくめた。

ルームメイトの尊（前書き）

未成年の喫煙描写がありますが、そういうた行為を推奨しているわけではありません。あくまでも演出の一つとしてなので、ご理解いただけるとありがたいです。

ルームメイトの尊

食堂での食事は毎朝七時から八時までの一時間と、十一時から一時までの一時間、六時から七時までの一時間と決められていた。食堂は全学年の生徒が座つても満席になることはなかつたが、ほとんどの生徒たちは早めに来るか、遅くに来るかのどちらかだつた。必ずこれらの時間内に食堂に行つて、無理にでも食べなければいけないといつうわけではなかつたが、食べても食べなくとも、食費は同じように学費から差し引かれた。また、おやつなどは授業の最中でなかつたら、いつでも食べることを許されていた。

食堂は管理棟の一階、つまり講堂の真上にあつた。

食事を用意するのは、学園の管理者が選んだ調理師十数名と一人の管理栄養士で、生徒たちは食堂に入つてすぐのテーブルの上にあらトレイを持って、ベルトコンベアに乗せられた機械部品のように列を作り、厨房と食堂を区切るカウンターを通りながらスープやパンやサラダなどを受け取るシステムになつていた。

マリウスと同室の、小柄で眼鏡をかけた黒髪のジャン・ポールは、自分が早く目覚めるのを利用して、それを商売にすることを思いついた。彼は毎朝六時五十五分頃に食堂へ行き、調理師たちが朝食の配膳準備を終えたと同時に、一人にも関わらず眺めの一番良い六人掛けのテーブルでゆっくりと朝食をはじめ、生徒たちで最も混雑する一十分ごろにその席を後から来た誰かに売るのだ。彼はそうして町へ出かける小遣いや、おいしいおやつ、レポートを書くために必要な図書館の本を真つ先に貸りることのできる権利、あるいは万が一いじめられたときのためのコネやボディーガードなどを得るのだった。

ラファランやマリウス、ラウル・ミシェルたちも、そういう手段

を一度も使つたことがなかつた。運が良ければテーブルで、悪ければ満席の中立つて食事をした。

アルテュール・ブランシャールはいつも一人で行動をしていた。はじめのうちは素行の悪そうな数人の同級生たちと行動していたが、どちらから離れていたのか、一週間もしないうちに彼は一人になつた。元々誰かとつるむとかそういうことが嫌いな性分なのかもしないが、同級生の男子生徒たちは、彼の外見に黙つて頬を染めるだけの女子生徒たちとは違い、ただ友だちがいないだけなのだろうと思っていた。

*

その日、マリウスは朝から顔色が悪かつたが、ラファランが止めて彼は授業に出席した。今にも倒れてしまいそうだったが、マリウスはこういう時に限つて厄介な頑固さを見せて、とうとう終業のベルが鳴るまで、彼は授業に出席し続けた。終わつてから、それで耐えていたラウル・ミシェルが怒りを爆発させ、彼を引きずつて医務室へ向かつた。

「六時半までに戻らなかつたら、悪いけど先に食堂に行つてくれる？」医務室に向かう廊下を歩きはじめたラウル・ミシェルが、突然振り返つて言った。

「ああ、わかつたよ」

ラファランは二人の姿が見えなくなつてから、やつと自分を含めて三人分の教科書と筆記用具　　加えてマリウスは毎日辞典とラテン語の文法書を持ち歩いていた　　を押し付けられたことに気づいたのだった。

結局ラウル・ミシェルとマリウスは時間までには帰つてこなかつたため、ラファランはアンナ・ヴェシエール学園に入学して以来、

はじめて一人で食事を取ることになった。小学校と変わらずに、ラフランにはこの学校でも気さくに話しかけてくれる友人たちがある。他の人にいたが、彼らはいまだに、ことあるごとにアルテュールとの殴り合いの話を聞きたがるため、内心彼はうんざりしていた。

食事を終えると、ラフランは食堂での友人たちにさよならを告げて、普段ならグラウンドや渡り廊下などに寄り道をするのだが、今日はまっすぐ寮へと向かつた。途中で医務室に行ってマリウスの様子でも聞きに行こうかとも思ったが、入れ違いになつてしまふ可能性があつたため、それはやめておいた。

渡り廊下を歩いているときに、裏庭の花壇の隅でラウル・ミシェルの兄がガールフレンドとキスをしている姿が偶然目に入つたが、その瞬間に、伯母夫婦が普段恥じらいも持たずに、いつでもどこでも人目をはばかることなく、熱いキスを交わしていたのを思い出してしまい、彼は心の中で顔をしかめた。

前を見ると、渡り廊下の端からラフランの次に背の高い、同じ一年生のジャックが歩いて来ることだった。筋肉質で喧嘩が強そうな体格をしているが、彼は平和主義者で、その拳をむやみに振り回すような男ではなかつた。隣には絵の模写が上手いと噂の、針金のように細いジョルジュを連れていた。二人ともおしゃべりに夢中で、まだラフランには気づいていらないらしい。

「アルテュール・ブランシャールはだめだと思うな」ジャックが言った。「愛想も悪いし、性格も悪い。なんか偉そうだしな。この間だつて声かけてたら無視したんだ」

「無視はよくするよね。僕もちょっとつつきにくいかなつて思つてる」ジョルジュはそう言つて相槌を打つた。

「よう」ラフランが声をかけた。

ジャックとジョルジュの二人は、学年代表にでも声を掛けられたかのように驚いた顔をしたが、すぐに笑顔で返事をしてくれた。

「これから戻るのかい？」ジョルジュが訊ねる。

「ああ。お前らは？ これからメシか？」

「まあな」ジャックが答えた。「混んでたか？」

「そこそこな」ラファランはジャックの厚い肩を叩きながら言った。

「じゃあな。ジョルジュもな」ジョルジュは振り返つて手を振つていた。

その時、ラファランは自分の考えがごく一般的な同級生と、何一つ変わらないことを再確認した。現に彼らの言つよう、アルテュール・ブランシャールは孤立しつつあった。本人は気づいていないようだが、気づくのは時間の問題に違いない。しかし、確かにラファランはアルテュールと殴り合いの喧嘩をしたが、心底彼が憎いわけでも、嫌いなわけでもなかつた。ただ、態度が癪に障るだけだつた。

噂話を頭の中で何度も繰り返し再生しながら、ラファランはこのことをアルテュール自身に知られてはならないとも考えていた。彼の孤立に拍車をかけることは明らかだからだ。

ラファランは東棟三七に到着すると、ポケットから鍵を取り出した。飾り気の無い鍵だ。女子生徒はほとんどといつていいほど、キーホルダーをつけていた。

ラファランのベッドは左側だつた。掛け布団もシーツの乱れも、朝起きたそのままだ。シーツを換えるのは毎週水曜日と決まつていた。広まりつつあるアルテュールへの不満を、本人に知られないようにするにはどうしたら良いか、ラファランは頭を回転させて考えた。考えようとしたが、本人のことを良く知らないため事態は難航した。もう少し様子を見ても悪くないだろうか。そんな考えがふと浮かんで、すぐに除外したが、結局そうするのが最良の手段とも思えた。

ラファランは無意識に、トランクから出発の前々日に義叔父の上着から押借したジタンを取り出していた。父も喫煙していたが、煙草の残り本数をきつちりと覚えているような人だつたため、ラファンがいつも押借するのは叔父の上着からだつた。

口に咥えて火の灯つたライターを近づけると、じゅう、という音と共に煙が立ちこめ、二酸化炭素が頭蓋骨を満たした。吐き出した息は白く、空中に広がり、もやとなつて消えていった。

そのうち、どうすればアルテユールに知られないかという考えは、煙と同じようにどこかへ消えてしまい、倦怠感と、心地よい酸素不足がラファランの頭の先から指先までを満たした。

無用心に施錠されていないドアが突然開いたときは、流石のラファンも飛び上がつた。ドアに目をやると、顔をしかめたアルテユールが立つていた。くすんだブロンドが煙を吸つて、さらにくすむのを想像しながら、ラファランは何を言おうか考えていた。アルテユールに対してそう思ったのは殴りあつ寸前が最初で最後だつたら、奇妙な気持ちにはなつていた。

アルテユールはラファランを避けて部屋の中を見回した。全てを見終わつてからようやくラファランを見ると、「一本くれ」とだけ言つた。相変わらず高慢そうな言い方だつた。あるいは、彼はそういう言い方しか知らないのかもしれない。

ラファランは枕元の煙草ケースから一本取り出して彼に差し出した。「ライターは?」

「貸してくれるか?」アルテユールははじめて謙虚に答えた。

些細なことだつたが、ラファランは奇妙な連帯感を覚えた。彼が喫煙を告げ口しなかつたからという理由ではなく、同じ場所で同じ銘柄の煙草を吸うことに何かしらの大きな意味があるよつに感じられたからだ。

昨晩、三三の坊主頭のレミー・マルローが上級生による洗礼を受けたというニュースは、あつという間に一年生の男子生徒たちに知れ渡った。マルローは否定していたが、同じ部屋のジャン・ジャック・モーリアが着替える時に、彼の背中に青く腫れた痣があつたと証言した。マルローは先週家族からチヨコレートの詰め合わせを届けられたばかりで、ことあるごとにそのことを自慢していたのだが、今朝はちつとも話題に出さず、その代わり五年生のある男子生徒が食堂で仲間たちとチヨコレートを頬張っていた姿が目撃された。

毎朝九時に授業がはじまる前に、寮の掲示板に学年代表によつて、荷物を届けられた生徒の名前が書かれた紙が貼り出されるのだが、マルローの名前は頻繁に上がつていた。アルテュール・ブランシャルは三番目に多かつた。

*

「狙われた理由がチヨコレートなら、僕には関係のない話かな」マリウス・ハルフォールは寝不足なのか、あくびをしながら言った。英語の授業の帰り道だった。ラファラン、マリウス、ラウル、ミシェルといつもメンバーで、女子生徒の四人グループを挟んで、五メートルほど先にアルテュール・ブランシャルが一人で歩いていた。

次の授業は国語で、普段なら同じ教室で授業が行われるため、移動する必要はないのだが、今回は特別に図書室で行うことになつた。

「荷物なんてまず届かないし」マリウスは皮肉っぽく言った。

「それで、誰にやられたって?」ラファランがラウル・ミシェルに

訊ねた。

「僕もよくわからないけど、情報屋が言つには『アンセーニュ（看板）』つていう赤毛の五年生だつてさ」

「情報屋つて？」

「ジャン・ポール」ラウル・ミシェルはちらりとマリウスを見ながら答えた。「席売つてのもあつて、いろいろ詳しいんだ」

マリウスは顔をしかめた。「人のものも勝手に使うけどね」

「殴つてやろうか？」ラファランが笑いながら握り拳を作つた。

「うーん……まだ大丈夫かな」

「いつも一人だし、ブランシャールが目つけられてなきゃいいけど」ラウル・ミシェルがそつと呟いた。

*

国語の授業の後、ラファランが男子トイレに行くと、入れ違いで三人の上級生が出てきた。太つた男、小柄な男、背が高く体格の良い男、一人は坊主で赤毛だつた。そのまま彼らは廊下に響き渡るような大きな声で、下らないおしゃべりをしながら、男子寮へ続く階段を下りていつた。

トイレはまだ放課後の掃除の時間ではないにも関わらず、床が水浸しになつていて、隅の個室のドアはモップで固定され、内側からは開けられないようになつていて。

陰湿ないじめの現場に違ひないとラファランは直感した。

ラファランはシューズと靴下を脱いで、靴下をスラックスのポケットに、シューズを洗面台に置くと、スラックスの裾をたくし上げて、水浸しの中をばしゃばしゃと水をかき分けて、問題の個室へと歩いていつた。

力づくでモップを外すと、ドアは内側へ開いた。くすんだブロンドの髪をした少年がカバーを下ろした便座に座つていて、頭のてっぺんからつま先までぶ濡れで、足元にはカバンごと水浸しの真新

しい教科書やノートが散らばっている。

「ブランシャールか？」ラファランが聞いた。

アルテュールは重たそうに頭を上げると、その青みがかつたグレーの瞳でラファランを見た。「タバコ持つてないか？」

「持つてるわけないだろ。授業だぞ」

そう言うと、アルテュールは怒つてハツ当たりをするかのように、ラファランへ何かを放り投げた。黄色の背景に大きな赤い文字で、「バベットの店」と書かれたブック・マッチだつた。

「お前、こんな店行つたことあるのかよ」ラファランはマッチを突き返した。

「さつきの奴から取つたんだよ」アルテュールは得意げに言つた。水をかけられた拳句閉じ込められたにも関わらず、全く気にしていないようだつた。「『こんな店』ってどんな店だ？」

ラファランは顔をそらして、小さな声で言つた。「大人の店」「パリじゃ有名なのか？」アルテュールは長い犬歯を見せつけるようく笑いながら、前髪をかき上げた。

「知るか。それで、さつきの奴つて、もしかして、ええつと アンセーニュとかいう……」

「そんな風に呼ばれてたなあ」アルテュールは便座から立ち上がりつた。「うげ、今日はパンツまで濡れてら……」

「前にも水かけられたつて」

アルテュールはラファランの言葉を遮つた。「それはそうと、ジダンの誓いだ。誰にも言つなよ。これはおれの問題だからな。言つたら殺してやる」

アルテュールの長い犬歯を眺めながら、ラファランはふと良いことを思いついた。「次の授業、遅刻するか」

「別にいいけど」アルテュールは肩をすくめた。「お前、親友のガリ勉はどうすんだ？」マリウスのことだ。

「あとで説明しとく」ラファランはトイレを見まわした。掃除道具入れを見てみると、へこんでいびつなアルミ製のバケツがちょうど

「一つあつた。ラファランはアルテユールを振り返つた。「嫌なら見てるだけでもいいけど、もしスカッとしたいんなら手伝えよ」

「はあ？ 何言ってんだお前」

「看板は五年なんだよ。五年の男子寮は一階で、あいつらは一旦寮に戻つたんだ。一階からは管理棟に行くにも、外に出るにも同じ階段を通らなきやいけないんだよ」ラファランは腕時計を見た。「おれがトイレであいつらとすれ違つてから、まだ五分しか経つてないから待ち伏せする。もし怖いならここに残つてめそめそ泣いてろ。おれは一人でも行く」

「ふざけんな」アルテユールは青白い顔をピンク色に染めて、ラファランからバケツをぶん取つた。「お前に仕返しなんかされてたまるかよ。おれが行く！ お前なんか来るな」

「勘違いするなよ」ラファランは掃除道具入れから二つ目のバケツを取り出した。「マルローのためだ」

*

ラファランとアルテユールが張り合つように、それぞれ水をたっぷり汲んだバケツを持つて二階の階段の陰に隠れていると、看板たち三人がだらだらと階段を上つてきた。その場所にはラファランとアルテユール、それからアンセーニュたちしかいなかつた。

緊張でこわばつた顔をしているラファランとは対照的に、アルテユールはまるで他人事のようにリラックスしていた。

先頭を歩いているのはアンセーニュで、その後ろに小柄でずる賢そうな男、大柄で太つた男があつていていた。一番最後に歩いている太つた男が廊下の中腹に差し掛かつた時、ラファランがアルテユールにしか聞こえないような小さな声で言つた。「今だ！」

二人は廊下に向かつて走り出した。アンセーニュたちが振り向いた時には、ラファランはバケツの中の水を太つた男にぶちまけていた。その丸太のように太い足に向かつてラファランがタックルする

と、男は簡単に尻もちをついて倒れた。

ラファランが顔を上げると、びしょ濡れの小柄な男が、空になつたバケツを頭に被つたアンセーニュに跨るアルテュールの上着を引つ張つて、殴るのを止めようとしているところだつた。アルテュールは上着を脱ぎ捨てて腹を殴り続けた。

「水汲んでこい！」

そうアルテュールに言われるまで、ラファランは口をぽかんと開けてあつけに取られていた。いくらラファランでも十四歳の五年生を圧倒することは出来ないだろうと考えていたからだ。予定ではいたずらをして、こらしめてそのまま逃げるつもりでいた。

太つた男が起き上がろうとしたところを踏みつけて、ラファランは自分のバケツを手にトイレへ向かつた。

「こっちだ」アルテュールは手招きした。

アルテュールはバケツを受け取ると、アンセーニュに被せていたバケツを外して、鼻をつまみ、いまだに悪態をつき続けている口を目がけて水をゅっくりと注ぎはじめた。彼は苦しそうに咳をしたが、アルテュールは手を止めなかつた。

一階の廊下は雨漏りでもしたかのようになつて水浸しになつていた。

ラファランは同室の恐るべき一面を目の当たりにして、確かに驚いたものの、殴りあつた時から彼が根つからの悪人ではないと直感で感じ取つていた。

「やつたな！」ラファランは黙つて追い越して行つたアルテュールの背中に飛びついて言った。

「うるせー」アルテュールはラファランが全体重をかけているのを何のその、彼を振り落とそうとその場でぐるぐると回つた。「いい加減下りろよ、デブ」

アルテュールから下りてめまいが収まつてから、ラファランは右手を差し出した。「ラファラン・デュボワ。よろしくな」

「……アルテュール。よろしく」アルテュールは恥ずかしそうに言ひながら右手を重ねた。

*

アルテュールとラファランは、二階廊下で勝利の余韻に浸つて、たが、始業ベルが鳴つたことで我に返つた。廊下でふざけて散々転がりまわつた結果、一人の服はびしょ濡れになつてしまつていたからだ。

ラファランの提案で、一度寮に戻り、服を着替えてから、次の授業が行われる理科教室に向かうことになつた。

一人が教室に到着したのは、点呼が終わつて授業をはじめようとしていた時だつた。

「デュボワくん、ブランシャールくん」理科教師は眠たそうな声で言つた。「次からは理由がどうであれ、事前に連絡をよこすように」「一体今までどこに行つてたのさ。心配してたんだよ」と、マリウスはラファランが着席するなり言つた。特別な理由でもない限り席順は自由だつた。

「色々あつたんだ。また話すよ。おい、アルテュール。お前も」つちに来いよ」ラファランは手招きした。

ラウル ミシェルはメモを取る手を止めて、頬杖を突きながらにやけ顔で言つた。「いつの間に仲良くなつたことやら」

その日の夕食後、ラファランはアルテユールを連れて、いつものようにトランプでもしようと、マリウスの部屋を訪れた。部屋にはすでにラウル ミシェルがいた。

普段参加しないマリウスも、アルテユールに指摘されてトランプと一緒にやることになった。だが彼は持ち前の頑固さで、ベッドの上でヨーロッパ史の教科書を開くことは譲らなかつた。

そんな時だつた。ジャン ポールが突然部屋に駆け込んできて、目を輝かせてこう言つた。「聞いたか？ アンセーニュたちが学長室に呼ばれたつてさ！」

ラファランとアルテユールは手を止めてお互いの顔を見た。そしてにやりと笑つた。彼らが全ての責任を背負つてくれたとわかつたからだ。

ラウル ミシェルだけは手を止めずに、胡散臭そうな口ぶりで言つた。「何でまた？」彼は教師たちが下級生への洗礼にあえて口出ししないことを知つていたのだ。

「一階の廊下で暴れまわつたんだよ！ 今あの三人と同じグループの五年が掃除してゐるよ。ここに来るときに見かけたんだけど、水浸しだつたんだ」

廊下を挟んで向かい合つた二部屋をグループとして、計四人で構成されている。班という呼び方もあるが、一年生はグループと呼んでいた。この四人で掃除当番やシャワーの順番などが組まれる。入学してから卒業するまでの八年間、部屋の割り当てと同じく、重大な問題が起きて部屋が変わりでもしない限り、メンバーが変更されることはない。また、グループのうち誰か一人でも問題を起こすと、連帯責任としてグループ全員に罰則が与えられる決まりになつた。

ジャン ポールがあまりにも大きな声で喋るものだから、いつの

間にか一年生たちが部屋のまわりに集まりはじめた。「でも、アンセーニュは何も言わないんだよ。理由も言わないし、反省の言葉も言わないんだ」

「言えるわけねーよ」アルテュールはとうとう堪え切れなくなつて噴き出した。「おれなら死ぬな」

「何だよ」ジャン・ポールは唇を尖らせた。「何があつたのか知つてるのかい？」

「知らん」アルテュールは笑いを堪えていた。「何も知らん。ラフ・アランが証人だ」

その場にいた全員の視線がラフ・アランに注がれた。それまで囁りつくように教科書を読んでいたマリウスでさえ彼を見ていた。

「おれだつて知らないよ」

同級生たちは落胆したため息をついた。ため息に交じつて、後からやつて来た人に、なぜこの部屋の前に人だかりができるのかを説明する声も聞こえてきた。

ふいに廊下が静まり返り、生徒たちはぞろぞろと解散はじめた。ジャン・ポールを含めた五人には何が起きているのかわからなかつたが、「道を開けなさい」と年老いた男性の声が聞こえてきたため、寮監のジャン・バティスト先生が来たのだとわかつた。

白髪頭のてつぺんが禿げあがつた、背の高い老いた人格者は静かな声で言った。「ブランシャール、デュボワ。学長室に来なさい」その声には異論や反論を許さない響きがあつた。

「お前ら今まで何なんだ?」と言いたげな目で、ラウル・ミシェルはベッドから立ち上がつた一人を見上げた。

マリウスは心配そうにラフ・アランの背中を見つめていたが、ジャン・ポールが興味津々な様子で一人を見送つているのを見つけるなり、恐ろしい顔つきで情報屋をきつと睨みつけた。

先に部屋を出て行つたのはラフ・アランだった。ラフ・アランの頭はジャン・バティスト先生の肩とほとんど同じ高さだった。アルテュールは何も言わなかつたが、部屋を出る直前に振り返つて、ほとんど

ど聞こえない大きさの声で、「多分それだ」と言いながらマリウスを、ヨーロッパ史の教科書を指差した。

*

ラファランとアルテュールは到着するまで、ジャン・バティスト先生も一緒にいるということで、一言も喋らなかつた。ラファランは一階廊下の件を、アンセーネコがとうとうプライドを捨てて打ち明けてしまつたのだと思つた。

学長室は管理棟一階にあつた。ドアはすりガラスの窓がついており、ほとんどぼやけているものの中の様子を見ることが出来た。あまり広い部屋ではなく、寮の部屋とそつ変わらないように思えた。入つてすぐの大きな窓からは校門が見えたが、日が暮れているため、街頭の黄色い光が暗闇に突然浮かんでいるだけだつた。部屋の中央にはデスクがあり、ファイルがいくつも積み上げられている。きっと各教科の担当教師や寮監などから渡された報告書が入つているに違いない。壁にはそれなりに値の張りそうな風景画が掛けられていた。入つて左手の壁に沿つてソファが三脚置いてあり、そこにラファランたちのヨーロッパ史を担当しているジュリアン先生が腰かけていた。まだ大学を出たばかりで若いにも関わらず、石頭な上に陰険な男として生徒たちから嫌われていた。濡れているものの髪にはきちんと櫛が通してあり、暖かそうなローブの下からは上質な生地の寝間着が覗いている。

学長の姿はどこにもなかつた。

「連れてきました」ジャン・バティスト先生が言つた。

「はい。どうも」ジュリアン先生はぶつきらぼうに言つた。

ラファランはいたずらっぽい笑顔を浮かべて、議題が看板ではなことを祝うように、背中でアルテュールと手を握り合つた。

一人の後ろではきはきとした女性の声がした。「遅れてしません」学長だつた。

彼女はジュリアン先生とは違つて、まだ入浴は済ませておらず、赤毛の髪はまだ頭頂部できつく結ばれていた。小柄だが見かけによらず、その小さな体はエネルギーに満ちている。

学長はデスクに腰を下ろした。そしてラファランとアルテュールの二人をそれぞれ見て、ジャン・バティスト先生を見上げた。「それで、何があつたんですか?」

「私から話させてください」ジュリアン先生が右手を挙げた。「ジュリアン、私が呼んだのは寮監である彼と、この一人だけですよ」

「ですが」ジュリアン先生は勢い余つて腰を浮かせた。

「私はいじめの仲裁をするつもりはありません」学長はきつぱりと言つた。そしてジュリアン先生を見て諭すように言つた。「話は後で聞きます。今はこの三人とで話がしたいのです」

「出ていけということですか?」

「そう聞こえませんでしたか?」学長はジュリアン先生が部屋から出て行つたのを確認してから言つた。「さて、なぜ彼をラテン語資料室に閉じ込めたりしたのか、話を聞かせてもらいましょう」ラファランとアルテュールはお互いを小突きあつたりしていた手をぴたりと止めた。

二人はなかなか口を開こうとしなかつたが、とうとう「アルテュールが呟いた。「理由なんてねーよ」

「ブランシャール、私の前ではもう少しきれいな言葉を使いなさい。もう一度」

「理由はありません」アルテュールは乱暴な口ぶりだつた。
「ジュリアン先生が気に入らなかつただけです」ラファランが言った。

「どのように気に入らなかつたのですか?」

「それは」ラファランは口をつぐんだ。

「あなたたちは特に理由もなく、教師をラテン語資料室に閉じ込めるのですか?」学長は決して怒らなかつた。

「閉じ込めてはいけないんですか？」アルテユールが言った。彼は敬意を払うとかいう言葉を知らないように思えた。

「例えばあなたが道を歩いていたとして、突然刺されたとしても文句を言わないのなら、閉じ込めても問題はないでしょうね」

アルテユールは返事をする代わりに、手触りの良さそうな短毛の絨毯に唾を吐いた。ラファランは隣の同級生の行動に目を丸くさせた。

「ブランシャール」とジャン・バティスト先生は低い声で答めるような口調で言った。アルテユールはそっぽを向いてしまった。

ラファランは誰か親しくもない他人に心臓をゆっくりと握られるような、ざわついた感覚を覚えた。不穏な空気を醸し出しているのは、他でもないアルテユール・ブランシャールだ。

学長は深いため息をついた。「反省の色が見られないのなら仕方ありません。反省作文五ページと、一か月の食堂掃除を言い渡します」

ジャン・バティスト先生は学長の視線に答えるかのように頷いて、口の中で「わかりました」と言った。

二人の男子生徒が寮監に連れられて部屋を出でていこうとするのを、学長ははつきりとした発音で呼び止めた。「ブランシャール、出でいくのは吐いたものを片付けてからですよ」学長はアルテユールと一緒に振り返ったベテラン教師と一年生を見た。「あなたたちは帰つてよろしい」

スコットランドから来た男

「それで、学長がこう言つたんだ。『私の前では丁寧な言葉を使いなさい』つてな」アルテュールは英語教室の椅子にもたれかかしながら、アウトローなりたいと思いつつ、度胸が無いため決してなれない同級生たちを前に、昨晩の武勇伝を語り聞かせていた。ラフランと友だちになつたことで、彼は孤独な生徒Aから英雄へとなつた。「正確には何て言つてたか忘れたけど、とにかくこんな感じの言葉だつたな。そんで、おれは唾を吐いた」

「何で？ どうして？ どギヤラリーが質問する。アルテュールはそれらを芝居じみた動きでなだめてから、優越感に浸つた表情でゆっくりと口を開いた。

「きれいな絨毯だつたぜ。ペルシャかカシミアだ。それともアンゴラかもな。理由なんてねえよ。ただうざかつただけだ」

学長室に呼ばれたというたつたそれだけでも、小便をちびつてしまつほどのギヤラリーたちは、きっと妄想したことだらう。学長室に呼ばれ、学長に尋問されている最中で、おそらく彼女のお気に入りの絨毯に唾を吐く自分の姿を。

しかし、アルテュールは最後の最後で呼び止められ、自ら吐き出した唾を掃除させられたという場面については一切触れなかつた。そんなエピソードがあつては英雄といえないからだ。

「ラフランもその場にいたんだる？ お前の話も聞かせてくれよ」ギヤラリーの一人が言つた。

ラフランはアルテュールの隣の席に座つて、マリウスとノートで陣取りゲームをしているところだつた。ラウル ミシェルは英語の単語帳を片手に観戦していた。

「忘れた」ラフランは振り返ることなく答えた。

「つまんねえ奴」そう言つて、彼は再びアルテュールの話に耳を傾けはじめた。

陣取りゲームではマリウスが一枚上手だったが、あと三手で確實にラフアランを降参させられるにも関わらず、彼はあえてそれをしなかった。

「マリウス、なぶり殺しなんて趣味が悪いなあ」ラウル ミシエールはいまやほとんど単語帳を見ていなかった。

「殺せ。いつそ一思いに殺してくれ」ラフアランはほとんど無効と思われる陣地に自分のマークを書きながら言った。

「うん。でも……ラフアランはまだ初心者だから」マリウスは腕を組んで考える振りをしながら言った。

「情けなんかいるかよ」マリウスが次の手を考えている間、ラフアランは右手で鉛筆をぐるぐると回して待っていた。九月の時点で、一年生の中でそれが出来るのはごく僅かしかいなかつたが、二ヶ月経つた今ではラフアランがコツを教えるまでもなく、約半分の男子生徒ができるようになっていた。ちなみに女子生徒たちの間ではあまり流行しなかった。

「ねえ、デュボワくん」ふいに女子生徒の声が聞こえてきた。「先生を閉じ込めたって聞いたけど……」彼女は黒髪を一つに縛つて、それぞれに青いリボンをつけていた。

ラフアランは彼女のそのリボンに見覚えがあった。「ええっと、ソランジュ・リサジュー？」

「正解」リサジューは恥ずかしそうに笑った。「学長室に呼ばれたつて本当?」

ああ、その話かとこいつにラフアランは顔をしかめた。「本當だよ。あそここの馬鹿が言つてるし」と彼は英雄ムッシュ・アルテュールを顎で指した。

「叱られた? 罰則とかあるの?」

よく質問する子だねとラウル ミシエールとマリウスが顔を見合わせた。

「食堂掃除がなんぢやらと、作文だつたかな。あんま覚えてないけど

「大変　「ごめんなさい。私のせいでしょう？」リサジューは胸に手を当てて、今にも泣きだしそうな顔でラファランを見た。

「うぬぼれんな」

そう言つて、ラファランは怪我や風邪を引いたときに、母親がそうしてくれたようにリサジューの髪を撫でた。一、三回撫でられてから、彼女はラファランの手を振り払つように顔を上げると、走つて女子のグループへと走り去つてしまつた。

*

「この間のレポートでA+だつたのは一人だけだつたわ。ねえ、教え方が悪かったとでも？」とエマ先生はややイギリス語訛りのあるフランス語で、苦笑いしながら言つた。

「ソルシエールつてば、えこひいきしたんじやないのー？」女子生徒の一人が冗談交じりに言つた。

「私があなただつたらしたかもね」

彼女はジュリアン先生とは違い、生徒たちから慕われていた。その高い鷲鼻から付いたあだ名は「ソルシエール（魔女）」だつたが、彼女は本名であるエマと呼ばれるよりも、ソルシエールと呼ばれるのを望んでいた。

「マリウス・ハルフォール」ソルシエールはマリウスの机の上にレポートを返却した。評価はA+。「よくやつたわね」

彼の近くに座つていた生徒たちがほとんど文法的なミスの見られない、それでいて主題を見失うことなく意見を述べている、細かい文字でびつしりと書かれたマリウスのレポートを覗き込んだ。

続いてレポートを受け取つたのはラウル・ミシェルだつた。彼は自分のレポートを見て首を横に振つた。「他の教科ならなんとかなるんだけど、英語となると手も足も出なくなるんだよな」

「お前島民なんじやねえの？」後ろに座つていたアルテュールが、マリウスの座席を下から蹴り上げた。フランスにはコルシカ島とい

う島があるが、彼はイギリスを指しているのだろう。

「マリウスは振り返って、むつとした顔で言った。「スコッチだけど何か?」

「だからお前そんなにチビでガリガリなのか。この国のもんを食わなきゃダメだろ」アルテュールが言った。

「やつぱりイギリスか!」そう言つたのはラファランだつた。「はじめて会つた時に、なんだかスコーンっぽいなつて思つたんだよ」「イギリスじゃない。スコットランド」マリウスは唇を尖らせた。そしてラファランを見て言つた。「今スコーンって言つた? 生き物ですらないの?」

「でもさ、マリウス」ラウル・ミシェルが慰めるように肩に手をやつた。「スコーンになる前は卵だつて生き物じゃないか」

「あれつて卵使うのか?」アルテュールが聞いた。戻つて来たばかりのレポートには目もくれない。

ラウル・ミシェルは首を横に振つた。「知らない」

三人の視線が、おそらくスコーンの作り方を知つてゐるであろうマリウスに注がれた。

「知らないってば。食べたことはあるけど、作ったことなんかないんだから」

「でも英語は喋れるんだろ?」ラファランは興味津々といった表情でマリウスを見ていた。

マリウスははつとしてラファランから視線を逸らした。「おじいちゃんとおばあちゃんは英語しか喋れないから、一人と話すときは英語を喋らなきやいけなかつただけで……だからその、形式張つた文章は多分読めないと思つ」

ラウル・ミシェルは頬杖を突きながらにんまりと笑つた。「イギリストついたら ごめん、スコットランドだつた? ビートルズだよ。今世界中で人気じゃないか」ビートルズという部分だけ彼は英語っぽく言つた。

「ビートルズ?」アルテュールは鼻で笑つた。「なんだそりや

「知らないの？ 兄さんが熱中してるとんだ。イギリスのバンドでねえ、マリウス、何か歌えないの？」

「歌う？ 無理だよ。おじこちゃんがいつも口ずさんでる歌ぐらしさか知らないんだ」

ラフアランがマリウスに向かって、きしかなくウイーンクした。「

今度音楽室に行つたらギターでも弾いてみるよ

「そんな……」

「それ以前に指が届くのか？」

アルテュールがちやかしたことに対し、マリウスはふんと鼻を鳴らした。「わかつたよ。やればいいんでしょ？」

スコットランドから来た男（後書き）

クリアファイル整理してたら、約一年前に書いた設定集といつかの走り書きが出てきました。例えば、ラファラン・エヴラール・レナルド・デュボワとか。といってもラファランのフルネームとか絶対に作中に出でこないです。

（なんでもフランスの方は親のミドルネームでさえ、『冠婚葬祭』時に初めて耳にするのも珍しくないとか）

主要メンバーの顔立ちやらは俳優とかにモデルがいるけど、紹介するもキモくなるのでお口にチヤックしておきます。

ダルターヤン

食堂の掃除は、夕食を終えてから消灯時間の十時までの間に行われる事になつてゐる。罰則の掃除には食堂の他にシャワー室、トイレ、廊下、各教室などがあつた。

食事の時とは違い、人もラファランとアルテユールを含めて四人しかいなかつたし、テーブルや椅子などは全て食堂の隅に追いやられていたため、別の部屋にいるようだつた。普段食事の受け取りをする厨房との窓には、アルミニ製の板がはめられていた。厨房の掃除は区の清掃員あるいは調理師の仕事のようだ。

ラファランは濡れたモップで、誰がこぼしたのかわからないヨーダルトらしきかたまりを擦りながら、昨日までほとんど毎日欠かすことなく行われていた、マリウスの部屋でのトランプ大会に思いを馳せていた。

アルテユールはテーブルと椅子の拭き掃除をしていた。濡れた雑巾でテーブルをなぞるだけで、あまり丁寧に仕事をしていない。

「あんた、ちゃんとやりなつてば」プロンドのボブカットの上級生が言つた。化粧が濃いせいか、それとも口つきが悪いせいか、罰則の常連といった印象を受けた。

「はあい」アルテユールは気のない返事をした。ラファランは彼の短気すぎる性格が、いつか大きな問題を引き起こしてしまつのではないかと心配していた。

ラファランは呼び出しを受けた日の就寝前や、授業中などの時間を使って、反省作文をほとんど書き上げてしまつてゐた。あとはまとめてある最後の一段落の書き出しが思い浮かばないだけだつた。アルテユールはといふと、まだ名前とタイトルしか書いていないと言つていた。反省作文を書く意味が分からぬといふのだ。書かなければ罰則が増えることは目に見えてゐるのに、彼は自分の身勝手さで自分の首を絞めている。

アルテュールが週に一度妹に宛てて手紙を書いていたことをラフアランは知っていた。妹が一人と、美人な母親がいる、というのがアルテュールの家族について知っている全てだつた。彼はとてもすらすらと妹への手紙を書いていた。だから、反省作文もそういう風に書けばすぐに書き終わるはずだと言つと、アルテュールは青白い顔を、ピンクを通り越して真っ赤にさせて、それとこれとはわけが違うと怒鳴つた。何が彼をそこまで怒らせてしまつたのかラファランにはわからなかつたが、それ以来妹の話は一切出さないことにした。

ラファランがやつとヨーグルトをこぼき落とした時、食堂の出入り口にラウル・ミシェルが立つていてことに気付いた。八時半という時間帯や、ノートと筆箱を持つているところから、週に一度行われる学年代表だけの集会、代表会の帰りだとわかつた。

「ブランシャールいる?」ラウル・ミシェルは小さな声で聞いた。

「アルテュール・ブランシャールを呼びに来たんだけど」我らが学

年代表ははつきりとした声で言つた。

「誰だつて?」

「テーブル拭いてる奴だよ」ラファランが窓際で雑巾と遊んでいる同級生を指差した。

「ああ、あのバカか。それで?」

「寮監が呼んでるんだ」ラウル・ミシェルは学年代表の腕章がよく見えるように、ノートを少し横にずらして左腕を前に突き出した。

「ジャン・バティスト先生が」

「テーブル拭き!」ブロンンドが怒鳴つた。「こっち来な。寮監が呼んでるつてさ」

そう言われると、アルテュールは顔を明るくして雑巾を放り投げると、浮かれた足取りでやつて來た。食堂を出ていく際にラファランの背中を一度叩いて行つた。翻訳すると、お先に失礼、だろう。「間違えるなよ。寮監室だからな。三階だぞ」アルテュールが廊下

をまっすぐ行こうとしたため、ラウル ミシェルが呼び止めた。

「また何かしたのか？」アルテュールが見えなくなり、ブロンドの上級生も元の仕事場に戻ったのを見計らって、ラファランが聞いた。「そのセリフをお前が言つたね」ラウル ミシェルは笑つた。「フイリップの本を隠したからだと思つ」

「お前と同室の根暗デブか」ラファランは掃除をさぼつていると思われないよう、モップも動かしていた。ただし同じところを何十回もこすつている。「本がなくなつただけでチクるとは流石だな」

「それでジャン バティスト警部によるさまざまな聞き込み調査の結果、犯人が見つかつたつてわけ？」

「じーさんも大変だな」

「だな」ラウル ミシェルは何かを言おうとして口を開きかけたが、口を閉じた。そして少ししてから言つた。「そういうや蒽セーニュがお前たちを殺してやるつて息巻いてるつてさ。噂つていうか兄さんから聞いたんだけど。『すかつとしたけど、やつて良いことと悪いことがある』って言つてた。それで、一体何やらかしたんだ？」ラファランは周囲を確認してから囁くように言つた。「復讐しただけさ」

「まあ、お前が好奇心で悪さをするような奴じゃないってことぐらいわかつてゐるから、心配してないけどな」ラウル ミシェルは腕時計を見た。「じゃあ、そろそろ帰るよ。しっかり掃除してくれたまえ」

「はつ、一切の抜かりなく取り組むであります」ラファランは敬礼して、笑顔で友人を見送つた。

アルテュールが戻つてくる頃には、ラファランは床にこびりついた食べ物を全て落としていた。柄を握っていた手に力を込めすぎたせいか、両手がじんじんと痛んだがまだ作業は残つていた。

「どうだつた？」アルテュールが食堂に入るなりラファランが聞いた。

「掃除が一週間伸びた。もう知らん」アルテユールは出でいく前に投げ捨てた雑巾を蹴り飛ばした。それブロンドの上級生の足元に落ちた。「ラファラン、次お前だぞ。学長室だ」

ラファランは手を止めた。「学長室？」「冗談だろ」「本当だよ。じーさんが言つたんだ」アルテユールはそつ言つて、ラファランの手からモップをぶん取つた。

ラファランには考えを巡らせてみたが学長室に呼ばれる理由が見つからなかつた。ジュリアン先生をラテン語資料室に押し込んだのを最後に、彼は何もしていなかつたからだ。

「行つてらつしゃい」と嬉しそうに言つと、アルテユールはラファランの背中を軽く叩いて、廊下へと押し出した。

*

学長室のドアをノックすると、中から「びひそ」と学長の声が聞こえてきた。

今晩は昨晩とは違い、学長ははじめからデスクに着いていた。銀縁の老眼鏡をかけている。ラファランが小学生の時に算数を教えてくれた男性教諭が、老眼鏡をかけていたからすぐにわかつた。デスクにはファイルが一つだけ出でているだけで、書類は角にまとめられていた。

「そんな出入り口に立つてないで、こつちへいらつしゃい。ソファに座つても良いわよ」

ラファランはジユリアン先生が腰かけていたソファを見た。座り心地は良さそうだが、座つたら昨晩の先生のようにみじめに見えるのではないかと思い、デスクの前に立つことにした。

「夕食前にリサジューという女子生徒がやつて来て、事情を全て話してくれました」学長は嬉しそうな声で言つた。

リサジューという名前を耳にするなり、ラファランは体のどこかが痛むのか顔をしかめた。

「私はあなたのような生徒が嫌いではありませんよ」彼女はデスクの上で手を組んだ。「授業中にラブレターに添える詩を書くのは感心しませんが、それを見つけ、授業中に読み上げたジュリアン先生に腹を立てたから、あなたは彼を資料室に閉じ込めたのですね？」

ラファランは反論しようと顔を上げた。顔は真っ赤に染まっていた。「昨日言った通り、それは、それには、そもそも、特に理由なんてないんです……アルテュールの言った通り、ぼくは、ただ先生が気に入らなかつただけで……」

「あなたがそう思つているのならそうしましよう」学長はにっこりと笑つた。「ですが、私はリサジューの話も信じます。ただし、罰則は罰則ですからね」

ラファランはもう何も言い返せなかつた。リサジューが泣き出しても尚、詩を読み続けたジュリアン先生に腹を立てたことは事実だからだ。現に彼女と学長はラファランがなぜ閉じ込めたのか知つてしまつた。しかし、ラファランはダルタニヤンと呼ばれたくて行動を起こしたわけではない。結果としてリサジューの敵討ちをしたことになつてしまつたが、ジュリアン先生を呼び出して閉じ込めることを計画し、それを実際に実行した時は、彼女のことなんて全く考えていなかつたからだ。

学長室を出てしばらく廊下を歩いたが、紅潮した頬はなかなか元に戻らなかつた。

その日は珍しく朝から晴れていた。

ラフアランは目覚まし時計に七時ちょうどに起されたると、隣のベッドで背中を向けて眠っているアルテユールを揺さぶった。なかなか起きようとはしなかったが、掛け布団を引つべがすと、彼はすぐ起き上がって不機嫌な顔を向けてきた。

「お前が起こせつて言つたんだろ?」とラフアランは自分のクローゼットを開いた。

「いま何時?」アルテユールは布団に手をかけて、また眠りにひつこうとしていた。

「七時半」ラフアランは嘘をついた。

「まじで?」そう言つてアルテユールは飛び起きて、ラフアランの枕元に置いてある田ざまし時計を見た。「まだ七時じやん。嘘ついてんじやねえよ」

「早く着替えて食堂に行かないと、いいボールが取られるぞ」

「ああ、そうだった。それを早く言えつての」

アルテユールはトランクから下着を取り出すと、ラフアランの目もお構いなしで着替えはじめた。彼は入浴は夜しなければいけない、という学校の規則に不満を言う生徒の一人だった。それとは関係なしに、水を嫌つているような素振りさえ見せる。

言いそびれたが、アンナ・ヴェシユール学園は制服着用が義務付けられている。ラフアランはもう田をつぶつて鼻歌を歌いながらでも、左右対称で完璧に結べるようになった。ネクタイを結びながら、洗濯室から返ってきたジャケットを、アルテユールがクローゼットから取り出してベッドに放り投げるのを見た。

「今日もマコウスのどこに寄るのか?」シャツの袖ボタンを留めながらアルテユールが聞いた。

「やめとくよ」

昨朝部屋を訪ねたところ、たたき起こされましたという文字を、顔に大きく書いたマリウスが出てきたのを思い出しながら、ラフランは首を振った。

ルームメイトと行動するようになつてから、ラフランはそれで体の中から湧き出していた外への欲求を抑えることをやめて、朝と昼休みと授業後など、時間さえあればグラウンドに出て体を動かすようになった。罰則を受けたせいで、週末の外出が禁止されたというのも、おそらく要因の一つに違いない。だが、それによつてラフランはマリウスとのこれまでの友好的な関係を壊すことはしなかつた。彼とは今まで以上に良き友人として接した。しかし、当のマリウスは、ラフランと話すことでアルテュールが気分を損ねることを知つていたため、ラフランと話すときはいつも眉間にしわを寄せていた。ラフランはそれに気づかない振りをしていたが、内心はマリウスに嫌われているのではないかと考えていた。

その日の音楽の授業で、放課後は音楽室が解放されていることを知つたラフランは、アルテュール、マリウス、ラウル、ミシェルたちに、音楽室に集まろうと提案した。マリウスの英語の歌に興味があつたし、彼と仲直りできる最後のチャンスだと考えたからだ。三人は一つ返事で快諾した。特にアルテュールは乗り気だった。彼が何か悪だくみをしているということは、教えられなくてもわかつた。

音楽室の壁には、防音のために小さな穴が等間隔に開けられたベニヤのパネルがはめ込まれてあつた。床はローマのコロッセオのようにひな壇のようになつてている。左右の壁にはショパン、ベートーベン、モーツアルトといった有名な作曲家たちの顔写真と名前が記載されたポスターが、ざつと見て十人以上は貼つてあつた。三人が座ることのできる長机や長椅子は、使い古されてニスが剥げていた。約束していた四時になつても、マリウスはやつてこなかつた。音楽室には本来教師の許可を得なければ、生徒だけで入つてはいけない。

いことになつてゐるため、ラウル ミシールはラファランが許可を得てないことを知るなり、急にびくびくした。ひょっとしたら例の兄さんから掃除よりも厳しい罰則についての話を聞いたのかもしれない。

ラファランはギターを探したが見つからなかつた。どうやら隣接している準備室にあるらしかつたが、ドアには鍵がかけられていた。音楽室にはトランペッタやトロンボーン、ヴァイオリンなどといった高価なものが多いからだ。アルテュールは真つ先に、ひな壇の頂上の隅に固めて置かれている打楽器のところへ行き、かけてあつた毛布を剥ぎ取つて、木琴やティンパニを叩きはじめた。音楽室にボオンと低い音が響いた。

「遅れちゃつてごめんね」と、マリウスは息を切らして音楽室にやつて來た。「カトリー・ヌ先生と話してたんだ」

アルテュールはマリウスに氣付かなかつた振りをして、今度はウインドチャイムを鳴らした。ピアノの陰から顔を出したラウル ミシェルはほつとした表情でマリウスを見た。きっとマリウスが教師か上級生かもしれないと驚いて、とつさにそこへ隠れたに違ひない。「なんだ、君だつたのか」ラウル ミシールはそう言つてマリウスの肩を叩いた。

「最近カトリー・ヌ先生とよく話してゐよな」ラファランが言つた。
「うん、ちょっとあつてね」マリウスはアルテュールから顔をそむけて早口に言つた。

「でも、国語の成績は良いはずだろ?」ラウル ミシールが言つた。
マリウスは色素の薄い眉をひそめて、言いにくそうに言つた。「

奨学金の話をしてたんだ

「ああ、なるほど」

ラファランは入学式の朝、マリウスのトランクケースが古すぎるあまり破れてしまつたことを思い出した。寝る間も惜しんで倒れるほど勉強に打ち込むのも、その奨学金とやらを得るためなのだろうか。この世の全てが金で成り立つていると思ひ知らされて、なんだ

か気分が悪くなるつた。

「お前大丈夫なのか？」

「うん、まあ、そこそこね」

マリウスは人を寄せ付けたがらないよつた、諦めまじりの作り笑顔を浮かべた。二人はもうそれつきり質問はしなかつた。

結局準備室に入る鍵を開けることができず、四人は音楽室の机に腰かけて、おしゃべりをして時間を潰すことにした。アルテュールは落ち着きがなく、すぐに机から離れて、音楽室の中にある興味深い楽器、音楽家たちの肖像画、それからこの四階の窓から見える遠くの風景を眺めたりした。

ラファランはマリウスを笑わせようと、ジョークやギャグを考えて、次から次へと披露した。しかしマリウスはそれよりも、教科書やノートといった勉強道具を持つてここに来なかつたことを気にかけていて、あまり笑つてはくれなかつた。

「お前つて本当つまんねえ奴だな」と、ラファランの何度もヨークが不発に終わった後に、アルテュールが言つた。「生きてて楽しいか？」

「アルト、そんなこと言つな」ラファランはアルテュールを叱つた。
「マリウス、気にするなよ」

アルテュールは「」ともなかつたかのようにまた窓の外に顔を向けた。マリウスは庇つてもらつたことが癪に障つたのか、あるいは本当に嫌いになつてしまつたのか、不明瞭な返事しかしなかつた。ラウル ミシェルが咳払いをして、不穏になりつつある空気を換えようと試みた。

「見ろよ、メリーポーラウンドが組み立てられてる」アルテュールが言つた。彼は一キロほど離れた空き地を指差していた。

「ぽつんとしか見えない……田が良いんだな」アルテュールの隣に立つて、ラウル ミシェルが言つた。

「収穫祭か何かかな。時期的に」マリウスは椅子から立ち上がりうつしなかつた。

「アルト、あんまり乗り出さない方がいいんじゃないか？」とラフアラン。

「故郷の村じや、花祭りの時にメリーゴーラウンドが来るんだ」

「花祭り？」ラウル ミシェルが訊ねた。

「六月にやつてんだよ」アルテュールは窓枠に危なつかしく腰かけた。

「アルテュール、下りろよ」

ラファランは窓の下を覗き込んだ。一階にコンクリートのベランダがあるだけで、落ちたら骨折、打ち所が悪ければ死ぬかもしれない。

「もしかしてナント？ だつたら昔言つたことがあるよ」ラウル ミシェルが言つた。

「ほんとか？ ジャあ会つたことあるかもな」

アルテュールは嬉しそうに笑つた。くすんだブロンドの髪が夕日に当たつてきらきらと輝いていた。彼はラファランの忠告を無視して、床につかない足をぶらぶらと前後に揺らしてはいたが、ある時、ほんの一瞬氣を抜いた拍子に手が滑り、背中から落下した。

ラファランは咄嗟に窓に足を掛けて、親友を救おうと飛び出した。氣のせいかもしれないが、落下していくアルテュールはどこか楽しそうだつた。しかし、ラファランが飛び出してきたことに気付くと、端正な顔は引きつり、一気に後悔という文字が顔を覆つた。

ラウル ミシェルだけでなく、マリウスまでへそがさんに付くほど身を乗り出して、落下していく一人を覗き込んだ。コンクリートに一人の体が打ち付けられたのを見て、ラウル ミシェルは音楽室を飛び出した。

*

田を覚ますとラファランは医務室のベッドの上に横たわっていた。消毒と古くかび臭い木材が混ざつた臭いが鼻についた。状況を確認

しようと頭を左右に動かすと、右隣のベッドの上で、アルテユールが反省作文を書いていた。あれほど書くのを拒み、提出しない分だけ掃除期間が増えようとも、頑として書こうとしなかつた反省作文をだ。彼はほとんど無傷なように思えた。強いていうと、頬に傷テープを貼っている程度だ。

一方ラフアランはとくに、左腕の肘から先が固まつたような感覚だった。事実、骨折した腕は石膏で固められていた。頭が重く、右手で触れてみると、鉢巻をするように包帯が巻かれていた。そこでやつと、彼は窓から落下一するアルテユールを助けるために、窓から飛び出したことを思い出した。

ふいにアルテユールが作文を書く手を止めて振り返つた。そして、ほつとした表情を浮かべた。

「おばちゃん！ ラフアランが起きたよ」

奥の部屋からおばちゃんもといおばあさん、改め校医が顔を出した。白髪ともブロンドともつかない髪を束ねている。

「あんまり大きな声を出すんじゃないよ」と彼女は言つた。年を取つてはいるもののつらつとした声だった。

アルテユールは校医を田で追つてはいるものの、ラフアランと田を合わせたがらなかつた。

「どこか痛むところはないかい？」

校医のおばあさんは、石膏で固まつたラフアランの腕を持ち上げたりしながら、優しい口調で訊ねた。その間アルテユールは校医の脇から顔を出して、不安そうな顔をして腕を見つめていた。

「どこも。大丈夫です」

「治る？ なあ、治るのか？」アルテユールが言つた。まだ田を合せようとはしなかつた。

「あんたはうるさいね。作文でも書いてな」そうきつく言つと、彼女はラフアランに向き直つた。「そうか。ならよかつた。今すぐこでも病院に行つて検査できるね」

「どのくらい眠つてたんですか？」ラフアランは恐る恐る訊ねた。

「ほんの一、三時間だよ」

壁掛け時計は七時を指していた。

「一）両親に電話しといたからね。お母さんがひどく心配してらしたつて言つてたよ。あんたね、親に心配かけるもんじゃないよ」

ラファランは受話器を片手に取り乱す母親の姿を、いとも簡単に想像することが出来た。それを横目に嘲笑うような顔でコーヒーを飲む伯母と、横柄な態度でジダンを吸う伯父の姿も。時間帯からいつて父親はまだ帰宅していないだろう。

「病院つて、大げさじゃないですか？」

「何言つてんだい。あんた頭打つたんだよ。覚えてないのかい？」

ラファランは答えなかつた。彼女は浅くため息をついた。「後から何かあつちゃ大変だからね。大事を取つて、検査を受けるんだよ」

そう言つと、校医は医務室を出て行つた。車を手配するのか、寮監に連絡を入れるのか、おそらくその両方だ。

ラファランはベッドに横たわつていた。そのままでは両親に対する謝罪や、きつとされるだろう寮監からの説教、友人たちへの言葉など、考えなければいけないことが山ほど頭の中から出てくるため、天井のしみを数えることでそれらを無視することにした。

いつの間にかアルテユールがラファランのベッド脇に立つっていた。

「大丈夫か？」

普段のような自信に満ちた悪がきの顔ではなく、ずぶ濡れでしょぼくれて縮んだ子猫のような顔をしていた。生まれてから初めて罪悪感というものを知つたというような顔だ。

「まあね。お前は怪我しなかつたのか？」

アルテユールは頬の傷テープに触れて、はがそうと爪でテープの端をひつかいたが、一ミリほどはがしたところでまた指を押し付けて元に戻した。

「昔から頑丈なんだ。なあ、その、怒つてない？」

「怒つてる」ラファランはいたずらっぽく笑つた。

「なあ、まじめな話なんだよ。おれ反省してるんだ。本当ごめん。

反省してる。馬鹿だつたよ」

ラファランはまるで自分が父親か教師にでもなつたような気分だつた。彼は黙つて右手を差し出した。

「お前だけが悪いわけじゃないよ。おれだつて飛び出した 握手

」

したら、お互いに帳消しにしよう」
アルテュールはそろそろと右手を重ねた。彼の手はとてもひんやりとしていた。

音楽室（後書き）

結構前に書いたんですが、学生時代にしてはちょっとさうが悪いかなと思って、考えるのをやめたまま放置していました。
一心一意で4ばかの学生時代は終わりです。

クリストフ・ブランシャール（前書き）

行き過ぎた体罰の描写があります。

クリストフ・ブランシャール

十一月のラパール村の花壇は、次の春に美しい花を咲かせるために、休暇期間の真っただ中だった。

クリストフ・ブランシャールは自宅の玄関先の石階段に腰を下ろして、通りを歩く人びとをぼんやりと眺めていた。身長は九歳の子供としては平均並みだったが、随分と華奢な体つきをしていて、くすんだブロンドの髪はぱさついていた。深いグリーンの瞳には常に不安の色が浮かんでいて、そのせいで学校では避けられていたが、ブランシャールという名前が、彼をあからさまないじめから守ってくれていた。

かつてサングヌーブに立ち並ぶどの邸宅からも、村で最も美しく広大な花畠が一望できたものだったが、今では邸宅と花畠とを隔てるようアパートメントや小学校、集会所などが立ち並んでいた。特権的な権力も、時代の流れと共に廃れていったのだった。

「こんにちわ」

郵便配達員の若い男が自転車に跨りながら挨拶した。彼がこの村に住む混血の女性と結婚して、半年前に移り住んできたということを、この小さな村に住む誰もが知っていた。

クリストフは返事をしなかつた。黙つたまま顔を背けて、老人のように一度頷いただけだった。母エリーズの教えで、この村に住む人々が、サングヌーブに住む純潔なバンパイアを敬うのは当然の行為だと思い込んでいたからだ。

郵便配達員は顔をしかめたものの、黙つて郵便ポストに手紙を二通押し込むと、何も言わずに自転車を走らせた。

クリストフは郵便配達員の姿が見えなくなつてから、おもむろに立ち上がり、届けられたばかりの手紙を取り出した。一通は父ロベールに宛てられた差出人不明の赤い封筒で、もう一通は妹アレット宛ての手紙だった。差出人はパリの学校に通つている兄アルテュ

ールだということは、確認しなくともわかつた。

クリストフは盗みに入るよう玄関扉をそつと開け、極力音を立てないように歩いた。父宛ての封筒をリビングのコーヒーテーブルの上に置くと、階段を上り、妹の部屋へ向かった。ここ一か月ほどロベールと顔を合わせた記憶がなかつた。彼は子供たちがエコールへ行つてから目を覚まし、夕食の前に出かけてしまつからだ。

アルテュールが家を出てから、エリーズはますますクリストフにきびしく当たるようになつた。そのため彼は子供部屋以外では声も出してはいけないほど恐怖におびえていた。エリーズは父親のクローゼットから使い古されたベルトを持ち出して、ことあるごとにそれで息子を打つた。服に隠れた細い体にみみずばれができ、表面の薄い皮は叩きすぎるあまり剥がれた。本来ならばエコールの教師に虐待を疑われるところだが、彼女は自分たちの治癒力が異常なまでに高いことを知つていた。寝る前に叩けば、寝ている間に跡形もなく完治してしまうため、誰もこの由緒正しいお屋敷で虐待が行われていることに気づかなかつた。

「アレット、入るよ」

クリストフは妹の部屋をノックして、五センチほどドアを開けてそこから顔を出して言つた。女性の部屋を覗いてはいけないと心得ているため、目は手で覆つっていた。

「いいよ」

アレットはベッドの下から、クリストフのお下がりの本を取り出しているところだつた。

「ああ、それ。読んでるんだね」クリストフは表紙をちらりと見て、嬉しそうにほほ笑んで言つた。

「ついさつ今まで読んでたの。でも、ノックしたのがお母さまかと思つたから」

エリーズの癪癩は妹の持ち物まで及んでいた。彼女の言葉から察するに、クリストフの本を彼女は読んではいけないらしい。彼は右側頭部のやや上にできている、小さな円形ハゲが妹に見つかないと

ように髪を撫でつけた。

「さつき、手紙が届いたんだ」

そう言つと、アレットは顔をぱつと明るくさせて、本をベッドに放り出して立ち上がつた。わくわくして今か今かと手紙を待つてゐる彼女を見て、もう少し楽園での生活を堪能してから言つべきだつたと後悔した。

「ねえ、クリストフったら。いじわるしないで早く見せて」

クリストフの頭に、兄と妹が出発の間際にこの部屋でキスしていだ光景が浮かんできた。あのろくでなしのことだから、彼女の事もただの暇つぶしか何かとしか思つていらないに違ひない。

「アレット」クリストフは興奮して震える声で言つた。

「なあに？」

「アルテユールはお前が思つてるような奴じやないよ」

「クリストフ、たらアルテユールに嫉妬してるんだわ」アレットは下唇を噛みしめていた。「お兄さまが人氣者だからつて」

「人氣者だつて？ 君は勘違ひしてる。あいつは乱暴者さ。この村が生み出した犯罪者の一人だ。今に見ていろ。きっと何か大きな問題を起こすに決まつてる。ねえ、アレット。君たちは兄妹なんだよ。いい加減目を覚ましたら？ お姫様みたいな生活をしている君には無理な相談かもしれないけど、何か間違ひが起きてからじや遅いんだよ。あいつがだめでも、きみなら目を覚ますことができるはずだ

」

アレットは薄いグレーの目を見開いて、涙をためてクリストフを見みあげていた。きれいな花畠を愚かな獵犬に踏み荒らされて、たいそつ立腹だつた。ベッドに座つた拍子に獵犬の骨、兄の本が床に叩きつけられてももはやお構いなしだつた。

クリストフは無意識な発作のようなものを、とうとう口に出してしまい、この家の中で最も傷つけてはいけない存在にナイフを突きつけてしまつっていたことに気付いた。

「アルトのことを悪く言わないでよ。何一つ知らないくせに。もう

出て行つて。この部屋に入らないで。顔も見たたくない。手紙を置いて、どこかへ消えて。ばか！」

クリストフはズボンのポケットから手紙を出すと、ベッドの上に置いて逃げるよう、しかし足音は立てないように静かに部屋を出した。

逃げ込んだ先は自分の部屋だった。老人の振りをしなければいけない牢獄、と彼はひそかに呼んでいた。粗末な学習机に突つ伏して彼は静かに泣いた。もう、あの部屋に入ることはないだろう。心のよりどころも失つてしまつた。いや、そもそも以前からこの家に彼の居場所など存在しなかつた。アレットはアルテュールがパリに行つてから、毎日手紙だけを生きがいにしていた。それにクリストフのお下がりの本だつて、お情け程度に読んでいたのかもしれない。彼女は本が叩きつけられたとしても平氣だつたじやないか。本が袁れな兄の唯一の友人だと彼女は知つていたにも関わらず。

下品で知能の低い使用人ドニとジゼル、生きているのか死んでいるのかもわからない父、ヒステリックで自分を認めてくれない母、自分の事しか考えることの出来ないわがままな兄、夢の世界へ閉じこもつて外へ出ようとしない妹。自分もこの家を形成する一部なのだとと思うと、胸が息苦しくなつた。

やがて、いつものようにゲスト用の寝室から母の叫び声が聞こえてきた。三時半から四時の間に必ずあるヒステリックだ。

階段を下りながら踏み外してみようと考えたが、即死でない限り体が元通りに回復してしまうのを知つていた。それでは意味がない。この家を離れて、どこか遠くへ行きたかつた。

豪華な家具と絵画で飾り立てられた寝室は、クリストフにとつて地下室の拷問部屋とさほど変わらなかつた。ドアというドアは鍵がかけられている。カーテンを閉め切つてゐるため、部屋は薄暗く、背の低いクローゼットの上に置かれたランプだけでは、部屋の中の様子を把握できなかつた。

「このけだもの！ 私のクローゼットから百フラン盗んだね」

部屋に足を踏み入れるあり、彼女は叫んだ。声は裏返つていて、女声特有の耳に痛いものがあつた。手には彼女の父のベルトを握っている。

例え身に覚えのないことだとしても、罪を認めなければ重い罰が下されることを、クリストフはエリーズから学んだ。

エリーズはベルトを振り上げた。「一体、誰のおかげで、ここに、住まわせて、もらつてると、思つてるんだ」

クリストフは経験上、うずくまつたり怒つたりすればまた彼女の神経を刺激してしまうことを学習していたため、両腕で顔を守る以外の事はしなかつた。腕にするどい鞭が何度も打ち付けられ、皮が剥がれ、血がにじんだが、クリストフは唇を噛みしめて耐えた。

「あんたは、あの男と、一緒だよ」

エリーズはベルトを投げ捨てたかと思つと、今度は息子の前髪を掴みあげて、蠅燭を覆つてているガラスとクリストフの頬がくついてしまうほどランプを近づけて言つた。

「汚い目だね。あの男にそつくりだ。うちに出入りする『あれ』と同じいやしい泥棒の目の色だよ。本当にうちの子かい?」

クリストフが黙つて涙を流していることに気付くと、彼女はランプを床に置いて、思いつきり一の腕をつねつた。

「めそめそするんじゃないよ。あんた、まったくあいつにそつくりだ。育ててもらつてる恩義を忘れるなんて図々し子だね。それに比べたらアルトは本当にいい子だよ。アレットだつて頭が弱いけど素直な子さ。あんたは一体誰に似たんだ。え? この間みた的に仮病使つて同情を引こうつたつてそうはいかないよ。あたしは何だつてお見通しなんだからね」

前髪が数本抜ける音を耳にしながら、クリストフは身に覚えのない罪に対してもつたのは、それから五時間のことだつた。牢獄の鍵を開けたのは叔父のルネだつた。その時にはクリストフが部屋から出してもらつたのは、それから五時間のことだつた。牢獄の鍵を開けたのは叔父のルネだつた。その時にはクリストフは部屋に息子を残して鍵をかけた。

彼が部屋から出してもらつたのは、それから五時間のことだつた。牢獄の鍵を開けたのは叔父のルネだつた。その時にはクリストフが部屋に息子を残して鍵をかけた。

フは疲れて眠つてしまつていった。傷はほとんどが治りかけていたが、まだ完治はしていなかつた。

ルネは仕事帰りでいくらか疲れているようだつたが、甥っ子を抱きかかえると、彼の部屋まで運んで行つてベッドに横たえた。布団を肩までかけてやり、寒さで震える手が落ち着くまで、傍に座つてずっとクリストフの手を握つていった。一時間もすると震えも収まり、ルネはほつとため息をついて部屋を後にした。クリストフが本当に病弱で、寝込むのも仮病ではないと知つているのは、子供たちを除いて彼だけだつた。

これはアルテュールが家を出てから、クリストフがルネの家で暮らすようになるまでの約半年間続いた。

ルネ・ブランシャール

十一月一日、土曜日の朝、クリストフがリビングへ下りていくと、コーヒー テーブルの上に一冊の冊子が置きっぱなしになっていた。一つはアンナ・ヴェシェールの入学案内で、もう一つはラパール村の観光案内だつた。クリストフはアルテュールが家を出てからというもの、ずっとアンナ・ヴェシェール学園に通いたいと思っていた。兄と同じ学校へ行くのは嫌だつたが、そこと公立中学以外に学校を知らなかつた。もしも公立学校へ行くとしたら、この家から通わなければいけない。ブランシャール家をはじめ、ラパール村に住む純粋なバンパイアたちは、そのほとんどがアンナ・ヴェシェールの卒業生だつた。時々例外はあるものの、エリーズもロベールもその卒業生だつた。クリストフは多少確信が持てなかつたが、よっぽどのことが無い限り、アンナ・ヴェシェールに進学できると思つていた。七月に実施される入学試験に合格する自信もあつた。なぜなら学年で一番の成績を取つていたからだ。

「クリストフ坊ちやま、何をご覧おいでですか？」しづがれた声がねつとりとした口調で言った。

リビングの奥の部屋からてっはんの禿げた赤毛の小男がやつて來た。右頬に罪人の証である「P」という文字が焼き付けられている。エリーズの熱心な教育により、クリストフは彼を見るなり、条件反射のように吐き気を覚えるようになつていた。

「何も見てない」

クリストフは汚れてよれよれでみつともないドニのシャツの胸元に、汚らしいしみがついているのを見つけた。この男は、この家に仕えて十三年になるこの下品な男は、随分昔に人間の娘と「何か」をしたために奴隸の称号を与えられたわけだが、こんな男の相手をするとはよほど男に縁がなかつたとしか思えなかつた。

「いえ、ドニは見ておりましたよ。学校の案内ですね？」

召し使いは冊子をつまみ上げて、これ見よがしにクリストフに見せた。笑った口からところどころ歯の抜け落ちた赤褐色の歯茎が見えた。

「アルテュールお坊ちやまほこの学校でとても楽しく過ぐ」しているそうですね。ええ、アレットお嬢ちやまから聞きましたとも。ドーは何でも知っていますから」

「無駄話をするつもりはない」クリストフは早口で言つた。「掃除でもしてこい」

「おお。こわい、こわい」しかしどーはその場を動こうとはしなかつた。そして冊子を裏返して言つた。「おやおや、これは来年のものですね」

クリストフの目が微かに見開かれた。

「貸してみる」奪い取るように冊子を手に取つて、裏に印字されている年を見た。《一九七三年度》となつていて。今は一九七一年だ。「本当だ。でも本当にぼくを入学させてくれるのかな?」

「奥様に聞いてみたらどうでしょうか?」ドーはいやらしく下品な笑い声を上げた。「さて、取り合ひてくださるかどうか

「取り合ひてくれるぞ。ぼくだって、お母さまの子供なんだ。多分、きつと」

ヒーラーズはダイニングルームにいた。テーブルに頬杖をついて、うとうととしているらしい。口を開かなければ、眉を吊り上げなければとても美しい姿だった。くすんだブロンドの髪はあたたかい太陽の光に反射して輝いていて、非の打ちどころのない素晴らしい横顔は、古代ギリシア時代の彫刻家の最高傑作といったところだつた。クリストフは兄妹の中で一番母親に似ていたが、彼女はそれを認めたがらなかつた。時々クリストフを別人と勘違いしているような言動も見られた。彼女にとつての理想の息子になれば、いつかは存在に気付いてくれる、認めてくれると考えていたが、体罰がエスカレートしていくこの頃は、はたしてそんな日は来るのだろうかという考えも浮かんでいた。

「お母さま、ぼくはアンナ・ヴェシール学園に通えるんですよね？」

エリーズは重たそうに瞼を上げて、周囲を伺つよつに薄いグレーの瞳を左右に動かした。それがクリストフの姿をとらえると、彼女はかつと皿を見開いて、わずか十歳の息子を無言でなじつた。彼女の白く細長い指に力がこめられ、みるみるうちに頬に食い込むように爪が伸びていった。

「今、何て言ったのかしら？」

クリストフは勇気を振り絞つて、母親の目を見た。彼の深緑色の瞳には恐怖が浮かんでいた。彼はつねづね考えていたのだ。自分はいつか『居酒屋』のラリーのように死ぬのではないかと。まだエリーズはロベルをなぐり殺してはいなかつたが。

「ぼくはアンナ・ヴェシール学園に通えますか？」声は震えていた。

エリーズは立ち上がりつた。爪はすでに五センチほど長くなつていた。クリストフは一步退いた。

「あんたは本当に疫病神だね！ ルネとそつくりだよ。どこに行きたいくつて？ どれだけ学費がかかると思つてるんだい。お前なんか公立校でも勿体ないくらいだよ」

エリーズは後ろを振り返ると、食器棚の扉を開け、普段は滅多に口にしないような酷い言葉を吐きながら、皿だらうとカッピ、だらうと何だらうと、見境なく手にしたものからクリストフ目がけて投げつけた。彼は呆然とその様子を眺めていた。あっけに取られるあまり、手の指一つ動かすことが出来なかつたのだ。

ロベルが実家から持つて来た、陶磁器の高価な皿がクリストフの足元で割れた。飛び散つた破片の一つは直径八センチほどで、勢いよく飛び上がって、鋭利な角で少年の右目から約一センチ下をざつくりと傷つけた。エリーズはまだ食器を割り続けていた。

「一体どうしたんです？」ジゼルがドアの間から顔を出した。ドニと同じく禁忌を犯し、「p」の烙印を受けたこの褐色の肌を

した若い女性は、クリストフの次にこの女主人に邪険に扱われていたため、あまり驚いてはいなかつた。彼女はダイニングの様子を確認すると、すぐさまドアを閉めた。

「どうなつてゐる？」ドアの向こうでルネの声が尋ねた。焦りが混じつた声をしている。

「またいつもの発作です

「まだです。すみません」

ルネはうめき声を上げた。「どうしよう。僕が行くとヒステリーがひどくなるんだ ああ、ドニ。待つてたよ。クリストフを連れきつてくれ。怪我をしてるんだ。頼むよ、君しかいないんだ」

ドアが再び開き、ドニがやつて來た。彼はエリーズの様子にぎよつとした顔をしたが、すぐさまクリストフの方を向いて、茫然としていた彼を抱きかかえて部屋を出て行つた。

廊下に連れてこられたクリストフは、混血の叔父と一人の使用人に囲まれて、その状況に顔をひきつらせたが、それよりも右眼下を触つて、大量に出血していることを知つてパニックに陥りかけていた。

「クリストフ、落ち着くんだ」

ルネはトレーンチコートのポケットからハンカチを取り出して、甥つ子に差し出した。

「これで傷口を押さえなさい。痛くても強く押さえるんだ。子供だろうとバンパイアには輸血が出来ないんだから」

クリストフは顔をしかめつつも、言われた通りにした。ハンカチは調香師というルネの職業柄、いくつもの花の香りが混じつた不思議なにおいがした。

ルネはクリストフを無理やりにでも抱きかかえると、一人を振り返つた。

「ジゼル、ありつたけのバケツを集めて水を汲んでくるんだ。そうしたらあの部屋に撒くんだ。君たちの仕事が増えるかもしれないけ

ど、鎮静剤が無いならそれしかない。バンパイアは水が嫌いだからね。多少は正気になるだろう。頼んだよ」

外はまだ太陽が出ていた。

ルネは玄関ホールに置かれている傘立てから持つて来た傘を手に、トレーナー「コートのフードを被ると、マーンストリートを挟んだ反対側にある自宅アパートメントまで早足で向かった。

ルネの部屋は一階にあった。階段を上つて裏通りに面したベランダの突き当りが玄関だつた。玄関ホールというようなものではなく、入つてすぐに低い靴箱が置かれていて、左手にリビングに続くドアがあつた。

ルネはリビングの葦で編まれた新しいソファにクリストフを座らせると、表通りに面した窓際（カーテンは閉め切つてある）のパネルヒーターの電源を入れた。部屋の隅のクローゼットから紙箱を探し出して、消毒液、軟膏、ガーゼ、テープを手に、ソファの前にある「コーヒーテーブルに腰を下ろした。

クリストフは顔をしかめたまま、興味深そうに部屋を見回していだが、ルネが正面に座ると、急に顔を緊張でこわばらせた。

「ハンカチをどかしてごらん」

クリストフは首を横に振つた。ルネはため息をついた。

「何も悪いようにはしないよ。君たちをどうにかしてやろうと思つてるなら、もうとっくにやつてるさ」 そう言つて、ハンカチに手を伸ばした。

「あ

クリストフは言葉を止めた。胸中に罪悪の意識が込み上げてきて、その先を言うことができなかつたのだ。代わりに、叔父の鼻を控え目に指差した。

「どうした？ ああ、これが」

ルネは鼻先に出来た、やけどをしたようなただれを触つて言つた。少しも動じず、もう慣れているというような口ぶりだつた。

純粹なバンパイアは日光などものともしないが、混血、つまりバ

ンパイアの血が少しでも混じっている人間は、直射日光だろつと日陰だろつと、少しでも光を浴びれば、流れているバンパイアの血が濃いほど、浴びた部分がやけどのようになってしまい、なかなか治らないのだ。命を落としてしまことも少なくはない。本屋のマリアンヌ・ブショの母親はそれで命を落としていた。

「ごめんなさい」

ルネはためらいがちにクリストフの肩に手を当てた。「傘を差さなかつたのは僕の判断だから、気にすることはないよ

「でも」

「こんなの放つておけばそのうち治るよ」

クリストフは叔父の深緑色の目をちらりと見た。これまで生きてきた中で、彼ほど心の広い大人を見たことがなかつた。怪我をしたときに手当をしてくれたのは？ 自分の身をていしてまで助け出してくれたのは？ 彼だけだ。考えてみれば苦しんでいるときにつもそばにいてくれた。それを今日までずっとましく思い、蛆虫のように考えていたのは誰だ？ クリストフは唇を噛んで、これまで自分が彼にしてきたことを罰した。

「クリストフ、きみの怪我の方が問題だ。手当をさせてくれるかな？」

クリストフは頷いて、彼の言つ通りにした。ハンカチをどかすと、血はもう止まつていた。ルネは消毒し、軟膏を塗り、ガーゼを当て、テープでそれを固定した。戦争へ行つて軍医でもしていたかのような手際の良さだつた。

治療を終えると、ルネはあたたかい紅茶を持つてきた。一口飲むなり、クリストフは体だけでなく心もぽかぽかしてくるような気がした。ドアの隣にサイドボードが置いてあり、そこに香水の入つた小瓶と、写真立てが置いてあつた。

「これは、グラースで最初に作った香水だよ」ルネは小瓶を手に取つて言った。

「グラースに行つてたの？ あの香水で有名な？」

「ああ。六年ほどね。あまりいい出来じやないけど、よかつたら嗅いでみるかい？」

クリストフが遠慮がちに頷くと、ルネはパネルヒーターの隣の物干し台から乾いたハンカチ一枚とつて、香水を一滴たらし、クリストフの顔の前で振つた。何の匂いかはわからなかつたが、気分でいうと、不安とためらいと高揚と希望が感じられた。これを調合した時の叔父はそんな気分だつたのだろうか。

「何歳だつたの？」

「これを作つたときかい？　十八か十九歳の頃だから、今から十年以上前だよ」

ルネの声はとても落ち着いていて穏やかだつた。クリストフは叔父の声には人の心を落ち着かせる何かがあるのかもしれないと考えた。彼の関心は香水から別のものに移つっていた。

「あの写真に写つている人は？」

クリストフは立ち上がり、写真を覗き込んだ。波打つブルネットの髪をした、ルネにそつくりな目元をした若い女性が優しげにほほ笑みかけてきた。彼女の肩を抱きかかえた男性の顔は、タバコか何かで焼かれていた。穏やかそうに見えるルネが、こういう荒つぽいことをするのは意外だつた。

「僕の母だよ。抱っこされている赤ん坊が僕だ。フルール・ディディエといつて、当時は町はずれの古い小屋に住んでた。その頃はバンパイアじゃない人たちはみんな小屋に住んでたんだけどね」

「ディディエ？」

「母は未婚だつたからね」

ルネはさりげなくクリストフの髪を撫でた。とても気を使つていて優しい手つきだつた。

「僕も七歳でブランシャールの家に引き取られるまでは、ルネ・ディディエと名乗つてたんだ」

「どうして引き取られたの？」

「母が病死したんだ。知つての通り、僕の父親は君のおじいさんだ

からね」

「ごめんなさい」クリストフは写真から離れた。

ルネは写真を手に取つて、母親の顔をじっと見つめた後でクリストフを見た。「謝ることなんかないよ。それに昔のことすぎて、本当に母が存在していたかどうかさえ危ういんだ」

「ルネがいるんだから、お母さんは存在したんじゃないの？」

「遺伝子というか肉体的にはね。でも、記憶に関してはほとんど忘れかけてるんだ。いまだに母の死を認めたくないだけかもしれないけど。とにかく母が僕の事をどう思つていたにしろ、僕は声さえはつきりと思い出すことができないんだ」

「もし、身近な誰かが死んだとしたら、僕もそういう風に思うようになるのかな？」

「さあ、わからない。僕の場合は離れている時間が長すぎるからね。母が亡くなつてからいろいろなことを経験したよ」ルネは頭を振つた。「ただ、母が大切な人じゃなかつたっていう意味じゃないんだ。優しくて働き者な母が大好きだった」

「ねえ、ルネ」クリストフは咳くように言つた。「ぼくが死んでも、お母さまはぼくのこと覚えていてくれる思う？」

ルネはショックを受けたような表情を浮かべ、そして、何も言わずにクリストフを力いっぱい抱きしめた。

「そんなこと言うものじゃないよ。ああ、クリストフ。なんてことだ

だ 子供は親より先に死んではいけないんだよ」

ルネはクリストフから腕を振りほどくと、肩を掴んだ。

「きみは長生きしなければいけない。絶対にね」

そう言つと、ルネはまた甥っ子を抱きしめた。

クリストフは自分が涙を流していることに気が付いた。その感情がどういうものか理解できなかつたため、きっと叔父のコートに染みついた、さまざまにおいのせいだと思い込もうとしたが、そんな理由づけすら追いつかないほどに、涙が次から次へと溢れ出した。同時に、彼の子供に生まれてくれば、透明人間のように扱われ、誰

かを怒らせはしないかとびくびくして過りす必要もなかつたのこと
考えて、少しだけ寂しくなつた。

十一月八日金曜日の午後二時、ラパール村に珍しく夕刊が配られた。村に四か所ある掲示板に張り紙がされ、村人たちは家の近所で、電話で、花畠で、パツサージュで、エコールで、役場で、教会で、そのことについて話をした。

クリストフはその知らせをエコールからの帰り道に、掲示板で目にした。

〈シモン・リュベン、村長を退任す〉

ラパール村一番の富豪であり、名誉村民でもあつたシモン・リュベン氏（七六）が、突如として九年勤めた村長職を辞任すると宣言した。氏は廃村の危機を迎えていた当村を、たつた三年で観光名所にのし上げた素晴らしい采配の持ち主である。

「四年の任期を全うできず、信頼してくれていた村の人々には本当に申し訳ないという気持ちしかありません」と氏は語った。

現在役場は後任者について検討しているが、氏の代わりを務められる人物を探し出すのは困難を極めるだろう。

それから一月後の十日午後六時半から、エリーズとロベールをはじめとする、サングヌーブに住居を構える村の有力者たちが役場に集められ、後任の件について話し合うことになった。

クリストフは自室の部屋の窓から、両親が家を出ていくのを眺めていた。父の姿を目にしたのは実に二か月ぶりの事だつた。くすんだブロンドの髪は汚れて黒っぽくなつていて、顎には不精髭を生やしていた。目は落ちくぼんで、ぎょろりと不気味に輝いていたが、常に何かにおびえているかのように拳動不審で落ち着きがなかつた。母は夫と並ぶのを拒んで、数歩先を歩いていた。

二人の姿が見えなくなるのを見計つて、クリストフは極力音を立

てないよう玄関ホールへ下りていき、ルネの家へ電話を掛けた。今頃ドーは風呂掃除を、ジゼルは夕食の片づけをしていると知つていたからだ。

「もしもし、ルネ？ 今大丈夫？」「

「ああ、構わないよ」そう言つた声は少し疲れている感じられた。「どうかしたのかい？」

「うん。特に何もないんだけど」クリストフは受話器のコードを指にぐるぐると巻きつけながら言つた。「シモンさんが村長を辞めたって聞いたから」

「その話か。そうだね、僕も聞いたよ」

電話の向こうから、フォークかナイフが食器に当たる、カチカチという音が聞こえてきた。

「少し前から具合が悪そだつたからね。みんな覚悟はしてたみたいだ。シモンさんのことだから身の回りはきちんとづけたんだろうね」

「どこが悪いの？」

ルネは声を潜めた。「純粋なバンパイアだけが罹る不思議な病気だよ。体が腐つていくんだ」

「治るの？」

「まだ治療法が明らかになつていないんだ。アメリカのバンパイア研究家たちは頭を抱えてるよ」

ルネはそう言つてから、咳払いをした。

「ところで、エリーズたちはもう役場に行つたのかい？」

「うん。さつき出て行つたところ」

「最近どう？ そのヒステリーは起こさない？」

クリストフは誰もいないにも関わらず、用心深そうに周囲を見回してから答えた。「うん。たぶん。いつもの日課みたいなものはあるけど」

「そう。もし何かあつたら、どんなに些細なことでも僕に相談するんだよ。いいね？」ルネは優しい口調で言つた。

「うん。わかる」クリストフは小さく笑つた。

それから、クリストフはアレット以外の人物にはじめて学校での出来事を話した。ルネは黙つて聞きながら、時々相槌を打つたり、質問をしたり、感心したりしていた。クリストフが話し終えると、ルネは現在取り掛かっている新しい香水についての話をしてくれた。役場の觀光部長から、村の花を用いた花祭りの名刺代わりになる香水を作るよう頼まれていて、それと、もうすぐ学校がクリスマス休暇になるから、アルテユールとロマンの帰省のことも話題に挙がつた。

「ロマンが帰つてきたら土産話を聞かせてもらおう」

「村長の息子の？ ルネはロマンと知り合いなの？」

クリストフは感嘆の声を上げた。ロマンといえば、子供なのに大人でも読むのに苦労するような本を読んでいて、この世のあらゆることを知つていて、そのイメージがあつたからだ。

「四年ぐらい前に、香水について教えてくれつて頼まれたことがあつたんだ。それがきつかけだつたかな。良い子だよ。クリストフもきつと仲良くなれるとと思つ」

「うん。ありがとう。楽しみにしてるね」

あつという間に二十分が過ぎていた。ルネの話に耳を傾けながら、玄関ホールの古いアームチェアに腰かけていると、受話器を当てていない方の耳が雪の中を歩く足音を聞き取つた。

「ごめんね。一人が帰つてきたみたい」

クリストフは早口でそう伝えると、返事も待たずに受話器を下ろした。そして命の危機といわんばかりに、あらん限りの力を振り絞つて、大急ぎで階段を駆け上り自室に逃げ込んだ。ドアと床の間の隙間に耳を近づけると、音がよく聞こえてきた。

次の瞬間、玄関扉が勢いよく開け放たれた。先に入つて来たのはエリーズだつた。雪と泥とタバコと役場の木材においがした。

「いまいましい！」彼女は叫んだ。「想像するだけでもおぞましい」彼女に続いてロベルが入つて來た。雪と泥とタバコと役場まで

はエリーズと同じだつたが、古びた紙と象牙のにおいもした。彼はリビングへ行つたかと思えば、毛皮のコートを身に着けてまた家を出て行つてしまつた。

「一体何があつたのでいらっしゃる？」「

ドーの声が地下室の方からエリーズに近づきながら尋ねた。水と煤と石鹼のにおいがする。

「何があつたのですつて？」女主人の声は怒りのあまり上ずつていて。「何があつたか？ ええ、聞かせてあげようじゃないの。混血が村長になるのよ。こん、けつ！ 知能が低くて野蛮ないきものよ。それだつたらオウムにでも任せらるべきだわ」

「奥様、ワインをお持ちいたします」ドーが言つた。「温めたワインを用意してまいります」

「ええ、頼むわ」

エリーズはそう言つと、リビングへ行きソファに腰を下ろした。まだ氣が立つてゐるようだつた。

クリストフはベッドに潜りこんで、母のいう立ちが收まるよう祈つた。

十一月二十一日の毎過ぎに、隣町を経由して毎時十五分にラパル村の停留所に停車するバスに乗つて、パリからロマン・リュベンが帰ってきた。朝から降つていた雪はまだ止まず、少しづらついていた。

彼は革張りで立派な装飾の施された大きなトランクと、買ったばかりのパリ土産の入つた紙袋を手に、端正な顔に涼しげな表情を浮かべていた。蒼色のダッフルコートに黒い襟巻を巻いているだけなのに、妙にハンサムに感じられた。夏に村を出た時よりも背が伸びていて、顔立ちもいくらか大人のようになつていた。彼は父親よりも亡くなつた母親に似たらしく、シモンとはあまり似ていなかつた。

その時、クリストフはサングヌーブの自宅からルネのアパートへ向かう途中で、ちょうどバス停を通りがかつたところだつた。バスから降りたばかりの少年が誰であるか知つていたが、来年の九月になつてもアンナ・ヴェシェール学園に通つことが出来ないと思うと、それだけで気分が重たく沈んだ。クリストフは黙つて通り過ぎようと俯いたが、バスから降りたばかりの少年 ロマン・リュベンに声を掛けられたため、驚いて足を止めた。

「やあ、君はどこの子だ？」

ロマンは自信に満ちて輝くような表情をしていた。クリストフが口を開こうとすると、彼は右手の平を見せて制止した。

「当ててみよう。日中堂々と道を歩くことができて、黄土色の髪をしているということは、ブランシャール家の子だな？ 分家に君ぐらいの子供はないから、本家の子だ。となると、ぼくが会つたことがないから、君は真ん中の子だな。そりだらう？」

ルネから話を聞いていたため、クリストフは普段なら抱くはずの警戒心を抱くことなく、素直に頷いた。

「名前は？」

「ぼくはロマン」

「クリストフ・ブランシャール」

ロマンは紙袋を持つた手でクリストフの肩を抱き寄せると、朗らかな声で歌うよつこにこう言つた。

「ブランシャール？ それが何だ。姓なんてこの村を出たら何の意味もなさなくなる。名乗る価値さえない。そんなもの捨ててしまえ。ぼくはもう名乗らないと決めた。ばかばかしい。きみもそうだ。この村の体制にうんざりしてるはずだ」

前触れもなく演説をするこの少年にクリストフはあっけに取られてしまい、何も考えることなく頷いた。

「よし、じゃあ今日とこにこの口に同盟を結ぼう。ぼくと君が初めて出会つた記念だ。どうしてこんな狭い村で十年近く一緒に過ごしていながら、一言も言葉を交わす機会がなかつたのだろうね？」

「年が離れているから？」

「年か。それもあるな。五年は離れているね。それからお互いの思想が食い違つてているというのも理由の一つだろ。さて、とこりでこの列車はどこに続いていると思つ？」ロマンは自分たちが歩いている先を指さした。

「さあ、わからない」

クリストフはロマンの持つている大きなトランクを見た。

「ロマンくんの家？」

「敬称なんてぼくたち子供には関係ない。それに家にはいかない。あんなところ、厨房から出た残飯ごみだ」

「どうして？」

「どうしたもんじつしたも、見ればわかるよ。親父は潔癖症かつレイシストで、死を恐れる愚か者だ。姉貴は旅先で知り合つたベルギー人と結婚することを夢見ている。ぼくはまだお花畠には行きたくない」

「家族をそういう風に囁つなんて意外だな」クリストフは苦笑いを浮かべた。

「ぼくは昔からじつなのだよ」そつこに妙にうやうやしこ態度で

胸に右手をあてがつた。「きみも不満があるのなら言つてみるべきだ。楽になる」

「言えないよ。言つたら追いつかれるかもしない」

「言えよ。言つべきだ。誰も聞きやしないよ。まあ、言つてみる。」

「言えないならぼくが代わりに言つてあげようか?」

「じゃあ、言つね。妹の悪口は言えなによ」

「その意氣だ」ロマンは片方の唇を吊り上げて笑つた。「まあ、言つてさららん」

「兄はわがままだ。自分の言つとおりにならなことすぐ怒る。乱暴で思いやつがない。お父や 父さんは何をしているのかわからぬ。顔色も悪いし、田つきも変わってきてる。何か悪いことをしているのかもしれない。わかっているのは父さん宛てに赤い封筒が届けられるということだけ。ただのコレクターなだけかもしないけど。お母さまは 彼女は怒りっぽい」

「それだけ? 母親に関することはそれだけなのか?」

クリストフはロマンから顔を背けた。「うん。これ以上はもう無いよ。それにロマン、きみのお母さんはもう「くなつたんでしょう? なおさら言えないよ」

「ああ、そう」ロマンはがつかりした表情をして、道に積もつた雪を蹴つた。「ほくのストレスを発散させる方法が、どうやらきみには合わなかつたようだね」

「ストレス? ねえ、ロマン。気分を悪くしたなら謝るよ」

「いいよ。その必要はないから」

ロマンは五歩ほど大またで歩いていつて、突然振り返つてクリストフの顔を覗き込んだ。

「なあ、どうしてきみはそんなにおどおどしているんだい?」

「どういうふう?」

「言われるまで気付かなかつたのか?」ロマンは追いついたクリストフと並んで歩きながら頭を振つた。「まあいいや。ところで、この道はどこに続いていると思う?」

クリストフはそこではじめて顔を上げて、目の前に続く道を改めて見てみた。パッサージュの入り口だった。アーケード屋根の下ではコートを着た人たちが買い物をしている。それを眺めながら、アーケード屋根の設置に至つたいきさつをぼんやりと思い出した。

今いる道を右手に曲がった先が、ルネの住んでいるアパートだと氣付くと、クリストフは笑顔を浮かべてロマンを見上げた。

「もうわかったかな？」ロマンが微笑みかけた。

「うん。やつとね」

「ねえきみ、なぜ子供だけでパッサージュに行つてはいけないか知つていいかい？」

「禁止されてるからでしょ」

「何かの取扱説明書に忠実なロボットみたいだな。質問を変えよう。なぜだめなのか考えたことはあるかい？」

「ない」クリストフは即答した。「パッサージュに行く時はいつもそのことしか考えないから」

ロマンは足を止めてトランクを握りなおした。

「学校で誰かをいじめはいけないのはなぜだ？　なぜ盗みをしてはいけない？　おもちゃを持つて行つてはいけない理由は？　禁止されているからという答えは認めないぞ。まあ考えて」

クリストフはなんだか面倒なやつだなと思いながらも、ロマンの言うとおりにした。家族やルネ以外の人物とこんなに長く話をしたのははじめてだつたからだ。

「道徳的に良くないから？」クリストフは言った。「倫理に反する行動だから？」

「おお、いいね。でもそれはおもちゃには当てはまらない。いじめや盗みは良くないことだけど、おもちゃを持つて行くこと自体は罪じゃない。持つて行つたとしても警察には捕まらない」

と、そこで言葉を切つて、クリストフが何かいうのを待つていたが何も言わなかつたためロマンは続けた。

「じゃあ、なぜ禁止されることになつたのか考えてみよう。ぼくは

学校で以前生徒たちがおもちゃを持つて行くことがブームになつたがために、生徒がそれに夢中になつて授業に集中しなくなつてしまつたと想像する。あくまでも想像だけだ。そうすると、なぜ先生たちが禁止にしたか理由がわかつてくる。つまり禁止というのは、以前起きたことを繰り返さないために、その元となつた行為そのものを封印するという意味があるんじやないかと、ぼくは考えるわけだ。ご理解いただけたかな？」

「う、うん」そう答えたクリストフの顔は火照っていた。「ロマンはすごいね」

「すごくなんかないさ。この間読んだ小説にこんなことが書いてあつただけで、ぼく自身が考え出したことじやないんだ。ぼくは他人の言葉を借りてそれっぽく喋つているだけで、ただのオウムにしかすぎないからね」

「そりなんだ」クリストフは先日の母親の発言を思い出して、返事に困つてしまつた。「じゃあ、パッサージュに行つちゃいけないってことも、過去に起つた出来事を繰り返したくないからなんだね？」

「大人たちは誰も何も言いたがらないけど、ぼくはそうじやないかと考えてる。それで、村の資料館から古い新聞を調べてみたんだ」「探偵みたいだね。どうだつたの？」

「探偵ねえ。その仕事にあまり憧れないな そう、十五年前にあそこで純粋なバンパイアの子供が一人死んでたんだよ。事故だつたしがれど、不可解な証言が多いんだ。でも、友人をはじめとしてパッサージュに住んでいる人たちは、そのことについて話したがらないんだ。だから真相は風の中つてやつだね」

ロマンの翻訳について：

彼はわざと書いてます。これを書いた前後に「テミマン」を読んでたのもあるけど、一番の理由はロマンが年齢的に中一いつことかな。

アパートに到着したものの、ルネは外出中で留守だった。ロマンはいつもそうしていいるかのように、一階に住むレニエ夫人を訪ねて、帰つてくるまで待たせてもうように頼んだ。夫人は息子夫婦と住んでいるレース編みの職人で、決して愛想は良くなかったものの、追い出すようなそぶりは見せなかつた。

表通りを歩くルネの姿を見つけたのは、窓際に立つていてクリストフだつた。二人は夫人に礼を言うと、外に出てルネを待つた。彼はいつものように髪を束ねて、よれよれのダッフルコートに身を包んでいた。彼のような性質を持つて生まれた人には切つても切れない縁のため、大きなこうもり傘をさしていて、もう片方の手には仕事道具の入つた革のかばんを提げていた。

「お帰り、ルネ」とロマンが言つた。

「ただいま。久しぶりだね、ロマン。僕もお帰りといつべきかな?」

「それならぼくもただいまと言わなくちゃいけないね」

クリストフはこの会話に意味もなく笑つた。二人も彼を見て笑つた。

「寒いな」

ひとしきり笑つたところで、ルネはコートのポケットから部屋の鍵を出しながら、子供たちを見て振り返つた。

「上がつていくんだろう?」

「もちろん」ロマンはトランクを持ち上げた。

ルネは部屋に入るなり、真っ先にリビングのパネルヒーターの電源を入れた。ロマンは部屋に入る前にトランクに付いた雪や融けた水をハンカチでぬぐつた。

クリストフはルネの部屋のさまざまな香りが混じつた匂いが好きだつた。死人のようにおし黙つて、口を開こうともしなくなつた自室は匂いひとつしないからだ。

ルネはかばんを葦のソファの足元に立てかけると、キッチンへ行つて湯を沸かしはじめた。

「適当にくつろいでいてくれ」

部屋に入ると、ロマンは紙袋から薄い長方形の紙箱を取り出して、コーヒー テーブルの上に置いた。パリの有名なチョコレート菓子店のロゴが印字されている。その文字は新聞の広告欄で時々見かけたが、实物を目にしたのはこれがはじめてだつたため、クリストフは二足歩行をする犬でも叩撃したかのように目を丸くして、紙箱をじつと見つめていた。

クリストフの視線に気付いたようだ、ロマンは優しく微笑んだ。

「あとでみんなで食べよう」

「うん」

湯が沸くのを待つてゐる間、ルネは戸棚から鎮痛薬の錠剤が入つた小瓶を取り出して、子供たちに見えないように背を向けて、コップに注いだ水道水で三粒飲んだ。

バンパイアと人の間に生まれると、日光に当たることもできなければ、始終倦怠感と軽い体調不良に悩まされるようになつてしまつた。その症状を緩和するために、洗礼を受ける混血者が多く、十五、六歳でその儀式を済ませるのが一般的だが、ルネは三十を過ぎた今でも洗礼を受けたがらなかつた。

「紅茶、それともコーヒー？」キッチンからルネが尋ねた。

「紅茶」とロマン。

「じゃあぼくも」とクリストフ。

じきに、ティーカップを三つトレイに載せて、ルネが部屋に入つてきた。

「学校は今日から休みなのかい？」ルネが聞いた。

「うん」ロマンはティーカップを受け取りながら答えた。「他の子たちがクリスマスカードとプレゼントを贈るつていうから、あとでパッセージュに買いに行かなきゃいけないんだ。明日は店じまいしちゃうから」

クリストフは去年のこの時期に、風邪を引いて寝込んでいたことを思い出した。アレットがパッサージュのおみやげに本を買ってくれて、その際にロマンと一緒に買ったと言っていたことも。

「それじゃあ、一服してから行つたらどうかな?」

そう言つて、ルネは返事を待つようにクリストフを見つめた。

「ぼくも一緒に行つていいの?」

「もちろん」ロマンは言つた。「遠慮なんかいるもんか。でも、なんだかルネは行かないように聞こえるな」

「実は用事があるんだ。役場に試作品をいくつか届けに行かなきゃいけなくてね」

「この前言つてたやつ?」クリストフが尋ねた。

「ああ。ちょっと厄介なんだ

減ティータイムにしないかい?」

ロマンは包み紙を開けて、中からチョコレートを出した。二十四個のチョコレート菓子が、金色の包み紙に一つ一つ丁寧に包まれている。そのうちの一つを彼はルネの母親の写真の前に置いた。

*

一時半に三人は部屋を出て、パッサージュへ行く道と、中心部へ行く道でそれぞれ別れた。ロマンはパッサージュへ行く前に一旦家へ戻り、トランクなどの荷物を置いていくことにした。

リュベン邸は村で一番大きなお屋敷だったが、シモンとロマンの姉マルゴとの二人家族では家を管理しきれないため、五人の召使いと二人の庭師を雇つていた。庭にはゴールデンレトリバーが放し飼いになつていて、ロマンを家族と認識していないため、彼の姿を見るだけたたましく吠えたてた。

「参つちやうね」

逃げるように自宅の門から出てきたロマンは言った。

「家を留守にしていた間に養子をもらわれた気分だ」

パッサージュへ行く途中で、クリストフたちの住むサングヌーブを通りかかった。目を凝らさなくとも、エリーズに肩を抱きかかえられたアルテュールが自宅の玄関をぐぐる姿が見えた。今晚から彼女の態度はもっとひどくなるかもしれないと思つと、気が重くなるのを感じた。

「ところで、君はずいぶんとルネに懐いているようだね」

パッサージュの商店街を半分ほど進んだ時に、ロマンが唐突にそう言つた。妬みや僻みといった感情は一切込められておらず、偶然すれ違つた女性に対して、さつきの人はきれいだつたね、というようなニュアンスだつた。

「うん」クリストフはやや誇らしげな表情で答えた。「ルネにはよくしてもらつてるよ」

「それならよかつた。実は彼から君について少し聞かされているんだ」

「どういつ風に？ 何で言つてたの？」

「上の子よりも聞き分けがあるとか、生まれつき体がそう丈夫じゃないとか、そういうことだ。一叔父としての率直な感想つてここかな」

「ふうん」クリストフは嬉しそうだつた。「ロマンはルネと仲良しなんだね」

「それほどでもないさ。世代も宗教が違わなければ親友になれたかもしれないけどね」

「そういうえば、カトリックについて聞きたかったんだ。誰にも聞き出せなくて」

「もしかして、君は洗礼を考えているのか？」ロマンの声は心なしに低くなつた。

「ううん。あんまり。ちょっと興味があるだけ」

「洗礼だけは受けるなよ。宗教が人の心を支える力を持っているにしても、僕たちバンパイアにとつてはろくなことが無いからね」

「どうして？」

「人間は僕たちの弱点を十字架だと思い込んでいた。今は、僕たちは何の信仰も持っていないからそんなの痛くもかゆくもないだろ。でも、信仰を持つてしまえばそれが弱点になる」

「弱点つていつも、ぼくたちは誰とも戦わないよ」

「今のところはね。でも、本当に洗礼を受けたい気持ちがあるなら、そうだな。僕ぐらいの年になつてから受けるかどうか決めるべきだと思うよ」

「実をいうと、この間ルネについて行つて教会のお手伝いをしたことがあるんだ。すごく楽しかった。ぼくはそこで自分の居場所を見つけたんだ」

「じゃあ、今の君には何を言つても無駄というわけか」
ロマンはイギリス人のように肩をすくめた。クリストフにはなぜかその姿がなぜか肯定的な態度に見えた。

入学許可と洗礼

アルテュールの帰省は、それまで以上にクリストフをルネの元へと駆り立てる原因になつた。普段は次男について無関心なエリーズだつたが、行動を把握していないと気が済まないようで、例え置き手紙を残していたとしても、外泊しようものなら怒り狂つてルネを真夜中だらうと呼び出しては、泥棒とか誘拐犯などと言って、しまいには私の家の財産が目当てなのだらうと罵るのだつた。そのたびにクリストフは叔父に対しても申し訳ない気持ちでいっぱいになるのだが、ルネは気にしていないというように甥っ子の頭を撫でるのだつた。

アレットの城はアルテュールのものになり、クリストフは隔離された牢獄で兄の残りの帰省日数を数えながら過ごした。そんな中、クリストフはロマンと偶然町で出くわした。彼は同級生に渡すお土産を選んでいるところだつた。少しおしゃべりをして別れたのだが、彼はその際に手紙を書くと約束してくれた。

一月五日にアルテュールが村を出発すると、アレットは一週間ほど抜け殻のようになつた。その可能性はあまり高くないが、もしもアルテュールがほかの女性と結婚しようものなら自殺しかねないだろう。兄が去つてクリストフの生活は元通りになつた。

ほとんど毎日のように学校を終えるとルネを訪ねた。一階に住むレース職人のおばあさんとも顔見知りになり、彼女はこの村に伝わる昔話や、バンパイアと人の混血者の生活について教えてくれた。

その日クリストフはある決心をしていた。おばあさんの肩をもみ、お茶を作るために湯をわかし、掃除をしていながらも、内心はそわそわして落ち着かなかつた。

「やあ、クリストフ。来てたんだね」

と五時半ごろにルネが慣れた様子で扉を開けて声をかけた。おば

あさんには礼を言うと、クリストフに視線を戻した。

「待たせて悪かったね」

「ううん。ルネこそお疲れ様」

クリストフはソファから立ち上がると、おばあさんに礼を言つてルネの後について行つた。

「それで、今日はどうしたんだい？」下駄箱の上にアパートの鍵を置きながらルネは穏やかな口調で尋ねた。

「うん。ちょっとね 相談したいことがあるんだ」クリストフはもじもじして答えた。

「今更何を遠慮してるんだい。さあ、言つてござらん」

二人はリビングに入るとそれぞれソファに腰かけ、ヒーターの電源を入れた。

「うん」クリストフは深呼吸した。「ぼく、実はアンナ・ヴェシエール学園に進学したいんだ」

ルネは少し驚いた顔をした。「姉さんにはもう相談したのかい？」

「うん。少し前にな。そうしたら

「ああ、あれかな？ 厨房の」

クリストフは頷いた。実の親に断られたことを例え血が繋がつているとはいえ、叔父が許してくれるはずもない。クリストフは提案を突っぱねる言葉を鋭い口調で言われるのを覚悟して、両膝の上で手を握りしめた。

「そういうことなら、いくらでも引き受けあげるよ。ずっと悩んでたんだろ？ こっちにおいで」

ルネは自分の隣に腰を下ろすよつて言った。クリストフは素直に従つた。ルネは甥っ子の頭を優しく撫でながら、落ち着いた口調で言った。

「姉さんには僕から言つておいてあげよう。きっとわかってくれるはずだよ。学校の入学希望書にはもう必要事項は書いたのかい？」

「返事をもらつてからにしようと思つて 前に家にあつたやつはなくなつちゃつたから、改めて送つてもうつんだ」

「そうか。試験は四月だからまだ間に合つだらう。」

「でも、やっぱり半分はぼくが払うよ。今はまだ駄目だけど、大きくなつて働くよになつたら少しずつ返していきたいんだ。」

「遠慮することはないよ」ルネは笑つた。「可愛い甥っ子のためだ。それに、そんなことを考へるよりも、試験の勉強をしなくちゃいけないよ」

「うん 本当にありがと」

その後、六月に行われた入学試験で、クリストフは一番の成績を収めた。その頃になると、彼は叔父のアパートで生活するようになり、ほとんど家には帰らなくなつた。ある日を境に、エリーズもロベルもあまりそのことについて気にかけなくなり、村で顔を合わせても赤の他人のようにふいと顔を背けてしまつよになつた。

八月にクリストフは学用品を買つたためにルネと一緒に隣町へ行き、制服や礼服を新調してもらつた。これまでエリーズはアルテュールのおさがりを次男には着せたがらなかつたため、彼は誰のものかわからないだぶだぶの礼服しか着させてもらえず、記念撮影のたびに写真屋たちに笑われ、慘めな思いをしてきた。

それから八月最後の日曜日までは本当にあつという間だつた。その日、クリストフはルネに頼み、村の教会でキリストの子として洗礼を受けた。彼は晴れて望み通りのカトリック教徒になつたのだ。帰省していくロマンはそのことを知るなり、これまで見たことの無い恐ろしい表情を浮かべて、クリストフに「僕は忠告したよな」と低い声で言つた。クリストフは彼の言つことには耳を傾けず、ただ自分がルネと同じカトリック教徒になれたことが嬉しいと言わんばかりに、不気味に笑うだけだつた。

入学許可と洗礼（後書き）

この章はもうちょっとと��くけど、クリストフの身边についてはこれで一旦終わりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4197t/>

プランシャール家の人びと

2011年9月3日03時36分発行